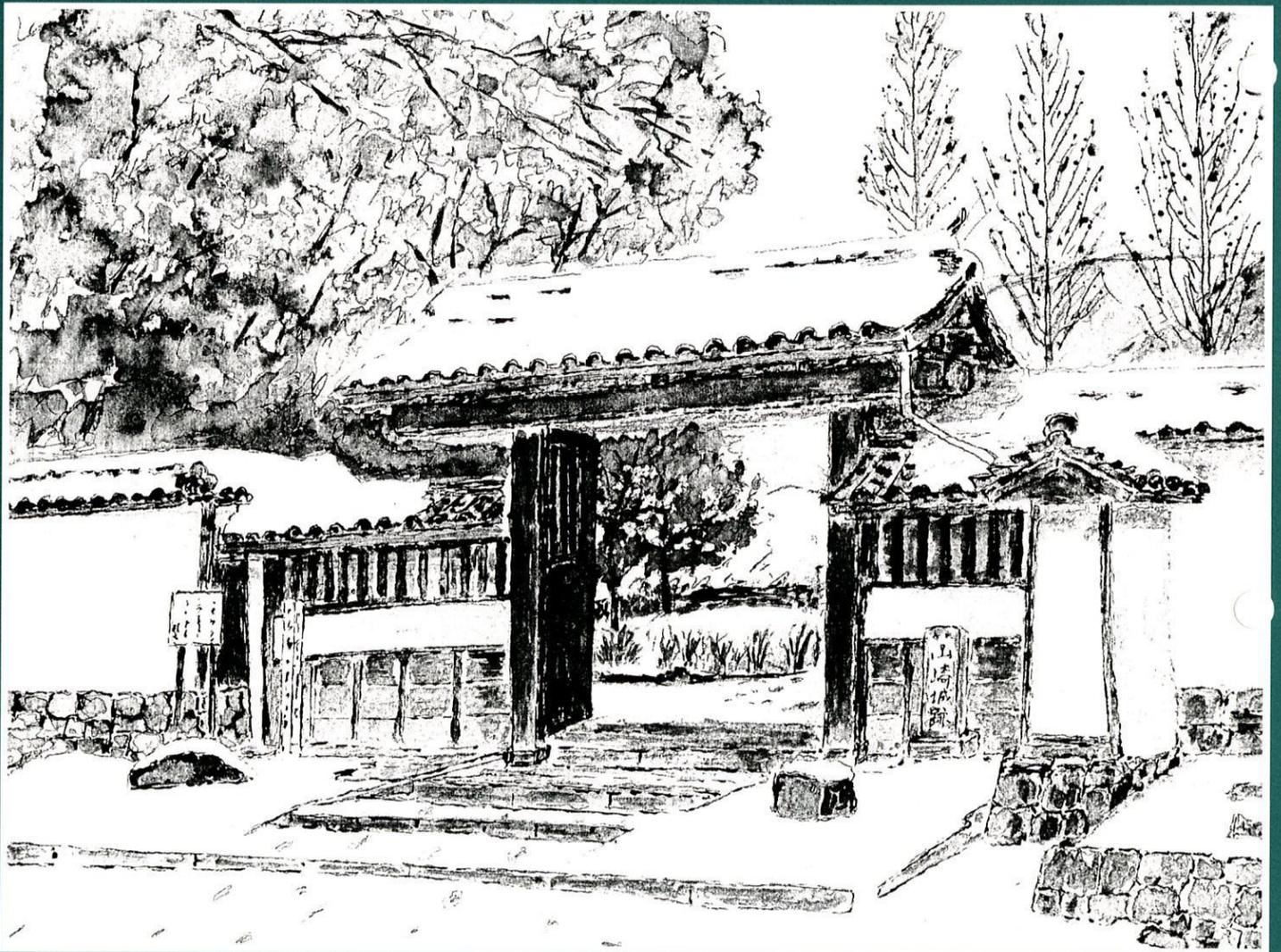


やまさき文化

' 1 2 - 3 * No. 3 1



宍粟市山崎文化協会



こどもや孫に残すもの

六栗市山崎文化協会会長 福岡久藏

暮れに、ぼんやり新聞を見てみると「ぜいたくは素敵だ」の文字を見つけた。なんとうまいこと「今」を表している、と思えました。軽くて弱々しく、オシャレで美しささえ感じます。私達は知らない間にすっかりぜいたくに浸かっているのです。

私など小学校一年生の時に戦争が始まり、戦況がはかばかしくなくなると「ぜいたくは敵だ」とか「欲しがりません勝つまでは」などと繰り返し鼻歌でも歌うように言って、我慢して、本当に質素な生活をしていたにもかかわらずです。

戦後六十六年。店先だけでなく、家の中も物が片付かないほどあふれています。外には車が一台、二台、三台と並んでいます。本当に豊かになりました。しかし、今、私たちが考えなければならぬことは、豊かさや便利さ追求のスピードが早すぎるため、地球環境が回復するのに間に合わなくなっているということです。

石油や石炭を燃やし続けることで起こる大気汚染に苦しんでいる人があり、二酸化炭素による温暖化は地球破壊さえ起こしています。

この度の福島原発事故も大変です。我が家がそこにあっても帰れない。田畑があっても耕せない。野菜を作っても食べられない。

汚染した建物を洗うといえます。洗った水はどうするのでしょうか。汚染した土地は削るといいます。削った土はどこへ持って行って、どのように保管するのでしょうか。とても、直ぐに間に合うというような簡単なことではないようです。

私達は「自分たちだけ生きられればよい」ということは許されないので。可愛い子や孫が続いているのです。

私たちは「安心して住める環境と安全で潤いのある自然を、大切な子や孫たちに残さなければならぬ」という責務があると思います。

私たちの少しの辛抱と、我慢で、良い地球環境を残すことができ、自然の再生に役立つのなら、考えてみなければならぬことと思います。

◇ 目 次 ◇

安吉橋の鬼	浅田 耕三	1
特別寄稿		
日本癌学会吉田富三賞を受賞して	前田 浩	9
短 歌	前田ゆきこ	12
俳 句	杉山美保子	14
突然思い出した真珠湾攻撃の歌	三宅 哲朗	16
合同研修旅行に参加して	宗平 圭司	17
巨木めぐり	伊藤 一郎	18
齢六十の新潮会	谷笹 利通	18
囲碁つれづれ	荒木 俊介	19
自然の中で文化を考える	中津八重子	19
宇原獅子舞が私に教えてくれたこと	井口 浩一	20
定着した「コンサートの夕べ」	平山 憲二	20
定期演奏会を終えて	堂田 萌	21
合唱をするということ	上山 千陽	21
卒団すること	杉山 華音	21
芸能祭とボランティアに	福原 良子	21
長谷川等伯と「松」	藤原 義弘	22
驚きと感動!!十年振りに		
日本舞踊に復帰し挑戦中です	上崎 栄子	22
長唄三味線と出会って	中井 妙子	23
詩吟を習って	立石 志織	23
〃	立石 志穂	23
山崎町民合唱一年生	阿曾 美穂	24
大切な一年	田中 奨真	24
平成会を通じて思うこと	長田 博	25
目の病	小野 晋	25
川柳 破丸会	清水 省三	26
ターナーアート展	田中 涼子	26
平成二十三年度 山崎文化協会特別事業		
事務局だより	大谷 司郎	27
編集後記	西川 博敏	28
表紙画	生田 安弘	28
カット	福岡 久藏	28
表紙題字	荒木 俊介	28

安吉橋の鬼

山崎文学会 浅田耕三

いとこの尾立芳齋が病で急死した。

その後釜として、尾立家へ婿入りするよう告げられた時、幸田種明はしばらくぼうっとしてしまった。夢でもみているような気分だった。

— これ程の果報がまたとあるうか —

生まれてこの方、よい事など何程もなかった。何の為に生まれてきたのだろうと世の中半分あきらめていた。なのにまるで降ってわいたような好運である。

尾立家へ婿に入るといのは地位と仕事を得ることであった。近江国の国衛に勤める雑掌が尾立家当主の代々の職分で、尾立家にはそれ相応の邸と財産があつて生活に窮するような心配は全くない。その上芳齋が遺していった、そして今度彼の妻になる尾立家のひとり娘みすずは一つ年長の二十九だが近在でも評判の美女なのである。顔は瓜実顔で眸がきらきらしていて色は抜けるように白い。すらりとした姿で、全身匂い立つような色香があつて物腰はたおやか、まだ子供は生んでいないから顔の色つやなど実にもみずみずしい。

そのみすずが自分の妻になると思うと、いくら抑えようとしても、ついつい気分が浮き立ってきて、種明は口元が緩んでしまう。

待ちに待ったその日、九月十一日の婚礼の日がいよいよやってきた。二度目の婿取りゆえ、世間に多少の遠慮があるという親類の長老の指図で婚礼の式と宴はごく内輪で地味に行われた。種明はそれが少々不満だったがそんな事はむろんおくびにも出さず終始神妙にふるまった。式は無事終わった。客もひき上げ新夫婦二人になって種明が殊勝な顔付きで座っていると、花嫁は化粧も落とさず婚礼衣裳も着替えぬまま、彼の前にきちんと座って名の通りすずやかな声で、しかし妙に凛とした口調で言った。

「お床入りの前にあなたに誓って頂きたい事がございます」

「誓う？」

「はい、今から私が読み上げます簡条に決して違背せぬとお誓い下さいますか」

「さあそれはー。ともかく聞いてみなければ何ともー」

「ごもっともでございます。では今からそれを読んでみましょう」

彼女はくるくると巻いて手に持っていた紙をひろげかけたが、ふとその手を止めて、

「ほんにそうでした。その前に私の前の夫の芳齋さまの事を少しお話申しておきましょう。それが順序でしょうから」

きらきらとした眸を上げて種明をみつめて言った。

「芳齋さまはたいそう真面目でよくできた方で、なさる事はそつがなく実に思慮のある立派な人でした」

「はい、わしもそう伺うております」

だからあなたもそうなれと言われたらどうしようと彼は内心ひやひやした。

逆立ちしてもそんな人間にはなれそうにない。だが彼女の言葉は案に相違した。

「でもいくら立派でもあまりに行き過ぎというのはどうも感心できません。過ぎたるはなお及ばざるが如し、という『論語』の教えもありますけれども、その通りだと思えます。芳齋殿は真面目一方で完璧な方ですがおもしろみがなく神経質で何か事に遭うとその成りゆきをひどく気にする人でした。他人の思惑も心配でまわりにいつも気をつかっておられました」

「——」

「ですからあのように心の臓の病にとりつかれ若死にしまわれたのです」

なるほど、と種明はいよいよ神妙な顔でうなずく。

「ですから夫となるあなたには次のような条件に合う人間になって頂きたいのです」

そう前口上を述べておいて彼女はひとつ、と紙をひろげて読みはじめた。

「何事も明るく陽気にふるまい包みかくさず胸襟を開いて人と交わるべきこと」

「ふたつ、人の中に出てはできるだけ目立つよう心がけ、見聞きした事はきちんとして、つとめて人の心にのこるよう伝えること、ただし嘘は厳禁、信用と愛嬌を旨とすること」

「みつつ、何事も臆せず怯まず勇猛果敢、尚武の気風を持ち、卑怯未練の振

舞いは最大の恥と心得るべきこと」

「よつつ、夫婦仲好く互いにいたわり合い、助け合うこと」
以上です、とみすずは読み終え、

「いかがですか、尾立家の当主として、また私の夫としてこれを誓って頂けま
すか」

「む、むろんです」と種明は吃りながらこたえた。吃りながら、やはりおれは
好運な男だと思った。彼女の出した条件は自分の生地そのままではないか。先
夫の芳齋をまねよといわれれば困惑することの上ないが、陽気にあけっぴろ
げに人と交わるのは、生まれつきのわが性分、武術も好きでこれ迄も鍛錬を欠
かさなかつたお蔭で今度仕える沢木康麻呂さまのご家来衆の中でもおそらく武
芸は一、二を争うのではあるまいか、とひそかに自負している。物事を深く考
えるのは大の苦手だが体を動かすのは最も得意とする所であつた。

きっぱりとした種明の回答をきくとみすずはうれしそうにほほえんだ。その
婉然とした美しさに種明は胸が顫えた。

かくて夫婦は日出度く結ばれ、種明は歓喜に包まれて尾立家の主となつた。

二

種明は新妻に送られて国衙（国府）に出勤する。ゆうべの名残りがしみつい
てまだ消えぬ火照り気味の体を少々もてあまして歩を運ぶ。心ここにあらず
といったその風情を朋輩が見て口々からかうが彼はそれさえもうれしいとい
わんばかりににやにやしてあけすけにのろけたりする。何事も包みかくさぬの
が妻との約束だつた。

彼のお仕えする主君は近江守に任官してまだ一年目、年頭の除目に初めて
国司に選ばれた三十六歳の少壮気鋭の地方行政官である。人柄もよく一族や
家臣によく目をかけ鷹揚で気前がよい。

一体、国司というのは収入のよい結構な身分なのである。任地が大国上国
だろうが中下国だろうが、中央上流貴族がやれ従三位だ、正四位だ、大納言
だ、参議だといひ、内裏に参上して卿相雲客の地位を自慢していても、地方
に豊かな荘園でも持たぬ限り内所は大したことはない。その点国司は領民の租
税を扱ひ国内の財政を管理し軍団の兵の監督から神社仏閣の統率、正倉に備蓄
する穀物の管理も、さらには犯罪者の笞、杖まで決する大権をもつ。だから
一国の守、その下の介、それがならずばせめて下の掾、目には選ばれようとこ

れ迄うだつの上がらなかつた徒輩はいっそう走り回り、新春の県召の除目が
近づく噂とびかい、当人はうき足だち邸は人の出入りが頻繁になる。

さて、種明の勤務する国府の館には雑掌、書生、あるいは多くの雑色たち
が働く。守の殿（国司）の行列に供奉して胡籙を負ひ太刀を帯びて警護の役に
もつく。碓鈍色の水干に裾濃の袴、烏帽子をはじめて被つた時、種明はまるで
天下でもとつたように気分が高揚した。元々単純明朗な男なのである。

地方の国衙という役所は多くの人が働き、さまざまの役職があるが勤めはさ
ほど多忙ではなく概して閑である。中央に出ず報告書をととのえたり、郡家か
ら届いた書類の種分け整理などをやっているが隣の間の詰所では世間話に興じ、
碁や双六をやっている者もいる。

「日野川の安吉橋に鬼が出るそうな」と一人が言った。

「うんうん、おれも聞いた。おそろしい赤鬼が人に化けて橋を通る旅人をだま
すというぞ」

「いや、近頃は近郷の者はもう誰一人あの橋は渡らんらしい。まあそれも尤も
じゃが、あの橋を通らんと京へ上るのも、東へ下るのもいかい遠回りじゃ、
困つたもんよ」

「誰ぞその鬼奴を退治してくれる勇敢な男はおらんものかのう」

上座に座つた里長の執事がぐるっと座を見回した。五十に近いこの人物は何
かにつけ取つたふるまいをする男で表情ももの言いもしごく重々しい。どこ
ぞで尊大な目代でもみかけてそれをまねているのであろう。郡司や里長は地方
の名家で人望のある円満な人物が多いが、中央から来る国司の下僚の中には時々
中央を鼻にかけて尊大な態度をするものがある。

「お言葉ですが、さような者はおりますまい。なにしろ相手は鬼。誰だって命
は惜しいですからな」と一人の書生がこたえた。

「いや、退治とまではいかなくても鬼奴の待ち構えておる前を悠々と通つて奴の
鼻をあかしてくれるような者はどうじゃ」

古来、鬼というのはその姿の醜怪なるに似合わず意外に矜持の高い生き物で、
その傲慢巨大な鼻をへし折られた、特にそれが矮小にして脆弱きわまる人間
によって、ということになれば、鬼奴は悲嘆絶望のあまりおそらく生きておる
まい、と執事はいう。

「さような者がおれば痛快の上もありませんが、その前に鬼に一掴みに捕ら

えられ手足をもぎとられてしまいましたよ」

実際、手足だけ残してほかはあとかたもなく鬼に食われてしまった若い女性の惨劇の例が場所もあろうに、京の内裏の宴の松原という所であったし、ある役所では早朝、役人の一人が両手足の爪だけ残して食われてしまった例もあった。

「——そうか、残念じゃのう」と、執事が全く無念そうに長嘆息した時、

「手前、やってみましょう」

庇の間の隅から一人の男が大声を上げた。見れば新参の尾立種明である。

「なにっ、其の方がやると？」

「はい、討つことはできずとも前を通って鬼を嘲罵してやるぐらいの事はできましょう」

居合わせた者は呆れたように種明をみつめたが、執事は手を搏った。

「ほう、新参の尾立殿は武勇殊の他すぐれ、胆力も見事ときいてはいたが、なるほどそこもとならやり遂げてくれよう。どうか不埒きわまる鬼奴をギューといわせ、存分に噛む者にしてやってくれい。さすれば、さすが国衛、凄いがおられると領民共もいっそう心服するであろう」

「有難うございます。言いだしたからには見事に役目果たしてみせますがひとつだけおねがいがございます」

「うむ、何なりと申してみよ」

「さらばでございます。お館の裏の厩に飼われております栗毛の『生駒』をお貸し頂けるようお計らい下され。手前その駿馬に跨り橋上の鬼の前を走り彼奴の間抜け面を嗤うてやりたいと存じます」

「よかろう。わしから守の殿へおねがいしてみよう」

主君の近江守は承諾してくれたが種明の身を案じ、決して無理をするな、危ないと思うたらすぐひき返せ、くれぐれも若い命を無駄にするな、などと念を押した。家臣の身を案ずる主人であった。

勤めてまだ日も浅いのに種明が生駒に目をつけたのはさすがであった。彼は武術に長けていたが乗馬術も又並外れていた。つい十日前にも京から見えた中納言橋基兼殿をもてなすため役所の馬場で催した競馬に断然他を圧して中納言殿の御感にあずかったのである。

夕刻、種明は役所から八町（約九百メートル）ばかり離れた瀬田の自邸へ帰っ

た。

「お戻りなされませ」

みずが玄関へ出迎えた。

うむと種明はこたえ、「そなたに話がある。ちょっと居間へきてくれ」

額について奥へ入った妻に種明は一部始終を話し、「そなたに相談もせずに大事なことを決めてしまった。軽率だとそなたはおこるかも知れぬが、あの場にいたらそう名乗り出ずにはおれなかった。持って生まれた性分と思うてゆるしてほしい」

「何をおっしゃいます。私は大そう立派だと思います。それでこそ私の夫、わが尾立家の誇るべき当主でございます」

「やはりそう思うて下さるか、有りがとう。しかし何といっても相手は鬼、とって食われるかもしれん。もしそうなら短い夫婦の契りだったと思うて諦めて下され」

「はい、わかりました」

「いやにあっさり言うが、わしが死んだら又誰かと夫婦になれるか」

「はい、多分」

「——そう。誰ぞあてでもあるか」

「いいえ、今急にいわれても早速には思いつきません。でも、そうね、あなたと一緒にあったのも前世からの因縁でしょうから、いっそあなたがよく口にされるあなたの弟さんなどいかがでしょう」

「あの、常陸の国衛に勤めておる弟か。それはよいかもしれんな」

「ではそうしましょう。けれど……」

「けれど何だ」

「あなた、それでよいのですか。私を弟さんにゆずって」

「いや、よくない。悔しい。そなたが弟に抱かれると思うと想像しただけで嫉妬で頭がくらくらする。気が変になりそうだ」

「そうでしょう。ですからぜひとも鬼に勝って無事帰ってきて下さい。あなた私の見る限り強運の持主のように思いますからきっと大丈夫です」

「どうしてそう思う」

「以前に私が陰陽師から聞いた話によると、頭のうしろが出っ張った男は運が強いということです。あなたは半分でっばっていますから」

種明は苦笑した。
妙なことが運を左右するんだな。あんまりあてにならないような説だが信じて
頑張つてこよう」

三

橋上に鬼が出るのは薄暮のころ、という。種明は侍所の別当から、特別
に守の殿がお貸し下さった甲冑に身を固め生駒に跨り大勢に見送られて役所を
出発、日野川めざして馬を走らせた。怖いとはさほど思わなかった。それどこ
るか氣息充実、五体に力が漲っていた。生駒も同様に勇みたち火のような鼻息
である。

どうも。橋の袂で馬を止め、暮れなずむ橋上に目を凝らした。薄霧と夕闇に
橋の半ばは隠れている。馬を進める。カッカと蹄の音がひびく。橋の中段
に女が一人、こっちに背を見せて立っている。見る者の胸にじんとしみいる
ようなはかなげな後ろ姿、種明が近づくと女がふり向いた。

薄墨を溶かしたような薄暮の中にくっきりとうかんだ若い女の顔、これはま
た何という美しさであろう、美しい妻の顔を見慣れている種明もさすがに息を
のんだ。頭にかすみがかったようにぼんやりとみとれかけたがはつと我に返っ
た。

こんな所に若い女などいるはずがない。これは鬼だ、と思った時、女は羞
いをかべた目で彼をみつめほえんだ。これは鬼だ、と思った時、女は羞

「もし、どうぞ私をその馬に乗せて瀬田の里までお連れ下さい」

ぶるんと種明は無言で首を横に振った。もの言う余裕などなく、ふるえる手
でぴしと馬に一鞭当てた。馬が走りだした。が、女は走ってついてくる。や
はり鬼だ、女がこの馬について走れるわけがない。種明は頸筋に氷の刃をあて
られたような恐怖を覚え、喉から奇声を発し必死の形相で馬を奔らせた。それ
でも女は追いかけてくる。いや、もう女ではなかった。地獄の底の呻きのよう
な無気味な濁声で待てーと喚く。

それでも怖いもの見たさ、一瞬背後を振り向くと、いつのまにか女は顔も胸
も手足も朱を塗ったような赤鬼、二本の角、目は猛火の如くらんと光り、
毛むくじらの手を伸ばし馬の尻に刃のような爪を立てようとする。

「おい、念の為じゃ、生駒の尻にな、たっぷりと油をぬって置いてみー」

出発前、仲のいい朋輩の雑掌太田某が種明に言った。

「油？どうして」

「わしの知りあいに長年鬼の研究をしておる者がおつての、そやつの言による
と、何でも鬼というものはめっぽう油に弱いそうじゃ」

「油に弱い？油に酔うのか」

「うむ、まあそんな所じゃ。人間は酒に酔うが鬼は油に酔うのかも知れんな」
なるほどと種明は朋輩の意見に素直にうなずき馬の尻にこつてりと油を塗っ
た。

人の意見にはしたがうもので、それがさいわいした。鬼は爪を立てようとし
たが油で滑って立たない。

「大まぬけの鬼奴ッざまみろッ」

振り返って捨て科白を一つ残して種明は全力疾走、主人の館へ駆け戻った。
館では皆心配して待っていてくれ、種明から話をきくと誰もが彼の無事を喜び
早速祝宴を張ってくれた。この時代の人々はおおむね善人だった。

当時の日本国の律令体制はまだ確固としており、中央も地方も秩序財政がと
とのい世の中はおだやかであった。だから鬼を翻弄して種明が帰還した時、素
直で善意にみちた役所の職員たちは、彼の勇氣ある行動をたたえその成功をわ
がことのように喜んだのである。

班田収授法などの矛盾が露呈し、国や社会がきしみはじめるのはこれ以後の
ことで、時代が下って南北朝の時代ともなると、甚だしい所では国衙領は国の
全農地の百分の一程にもなる一方、地頭の莊園領主化がすすみ、在地の小領主
が一円的な封建的所領を実現し、皇室、中央貴族の本案、領家職などは急速に
有名無実化していく。

閑話休題、さて――

種明が一番嬉しかったのはみずすが「お見事、やはりあなたは私の自慢の夫
でございます」と涙ながらにその勇氣を褒め、彼に対する愛情がいっそう細や
かになったのと、もう一つは殿が褒美として生駒を下さったことである。彼は
自邸の裏に新しい厩を作つて生駒を入れせせと世話を焼いた。

四

その五日後、種明は物忌みに入った。

三日間、飲食、言行をつつしみ、沐浴して身を清め一部屋にこもるのである。

実は三日前の夜、役所から歩いて帰っていると彼の四、五間先を、背が三尺程の墨染を着た小坊主が両手を踊るように振り振りびよんびよん跳んでいく。

じっと目を止めるとその仕草が妙に愛嬌があって手の振り方、足のはこびが律動的でいさみたつようで、本来陽気な種明はついっられてついていった。五尺五寸の太の男が三尺の小僧のあとを惚けたような顔でついていく。ちょうど月夜であった。

半町程歩いた所で急にその小僧がとまってうしろを見た。まん丸の顔に大きな目が二つ、ごろんとついて真赤な口がひきつったように歪み、「大うつけ奴」と叫びケケッとわらった。種明はぎくっとした。初めて相手の異様さに気付いたのである。

「痴れ者奴ッ」

叫んでそやつの両肩をつかんでひきすえようとした。がいち早く小僧は跳びのきくると振り返って又ケケッと笑った。

「おのれ妖怪ッ」種明は太刀を抜き、真向から斜交に一刀をあびせたが、相手はとっさに消え、白刃はむなしく空を切った。

「こいつは凶兆だッ」と種明はさとした。

それで翌々日から災厄を避けるために部屋にこもった。むろん勤めも休む。物忌みは陰陽道にいう天一神、大白神の遊行と自分の行き先の方角が重なっている時も行なうが、こんなまがましい事に出会った時にもこもる。

物忌みに入った三日目の朝巳の正刻（午前九時半）頃、門前にガラガラという荷車の音と案内を乞う人声があった。

「あなた、弟御の博明様がお見えになりました。兄上にぜひお目にかかりたいと仰せです」

「せっかくだが只今は物忌み中で誰にも会えん。今日はどこぞに宿をとって明日出直してくるよに言ってくれ」

「でも、遠い常陸からはるばる会いにきて下さったんですよ。ちょっとでもお会いになったら」

「いや。そしたら折角の物忌みが崩れてしまってどんな災難がふりかかってくるかもしれない。やはり会うのはよそう」

そうですか、と一たん下った妻が再び顔をのぞかせた。

「博明様と常陸へ共に下っておられた母上様が先達でお亡くなりになられたそうで、このたび京に上るにあたり、母上の形見の品々を兄上にお届け、お母上のお最後の様子などつもる話を兄弟でしたいゆえ、ぜひとも、お会いしたいと仰せです」

「なに、母上が身罷られたと。ならば会わんわけにはいかん。物忌みは又後日、あらためてすることにしよう。客間へ通してくれ」

主君について任地へ赴いていた弟と久し振りに会い兄弟は親しくつもる話をかわした。

みずずはそれを見届けて昼餉の準備に台所に立った。遠国から訪ねてきてくれた弟の為に精一杯腕を振るおうとしたのである。

ところが――。

程なくして客間からどたたとという大きな音がきこえてきた。何事ならんと思わずが仰天して客間を覗くと、兄と弟がはげしくとっ組み合いをやっている。「もしっ一体どうしたのッ、兄弟でそんな事してッ」

しかし二人はなおも大声でののしり合い、相手を押し倒そうと必死の形相である。彼女の力では何ともならず呆然として立ち竦んでいると種明の力がまさっていたか、弟を組みついて、「みずず、刀架の刀を取れッ、早く」

「何をおっしゃるの、あなたッ、弟さんを手にかけるつもりッ」

「ばかッ、こいつは弟なんかじゃないッ、鬼だ、こないだの鬼だ」

「鬼ッ？ そんな馬鹿な、この人弟さんよッ」

言い合っているうちに下にいた弟が兄をはね返し、上にのしかかっと思つと、がと兄の首筋に噛みついた。と、種明の首から激しく血が噴きだし五体

たちはまち萎え、ぐずぐずとそこにくずれてしまった。

弟は立上がってぶるっと一つ身震いして外に飛びだすやいなや身の丈一丈もあろうかと思う赤鬼に変じた。

「あなたッ」

悲鳴をあげてみずずは夫にとりすがったが血まみれの種明はもはや息絶え果てていた。鬼の姿はもうその辺にはなく、荷車を曳いてきた下人も消えていた。いずれ奴等も同類だったのだろう。

車に積んだ長櫃は蓋を取ってみると人の髑髏、肋骨、まだ血糊のついた手足、

耳などなど吐気をもよおすものばかり。みすずは失神し一日たつてやっと正気にかえったが、かえるとまた夫の柩の前で泣きくずれた。

自分があの時刀を取って渡してさえいたら夫は死なずにすんだ——そう思うと居てもたつてもいられない。

なんと私は愚か者であろう、私が夫を殺してしまった——。

勇気をもて、人に後れをとるな、陽気に目立つことをやれ、女々しい振舞いをするな、そんなことばかり言つて夫をけしかけ、可惜若い命を散らさせてしまった——悔恨が胸を噛み、軀を苛んだ。

十日間程彼女は気が抜けたように日を送った。ろくに食事も取らず、夜着の中で輒反側した。

「何度もこぼすようだけど、鬼というのはどうしてこうも非道なのでしよう。種明殿が一体鬼にどれ程のあだをしたというの、馬に乗せなかつたというだけなのに——」

種明の位牌に香をあげ、みすずは、そばにいる女房、左門に声をかけた。目を赤く泣き腫らしている。左門がこたえた。

「そこが鬼なんです。人間の持っている情けとか、あたたかさ、思いやりなどは全く無縁の生きものなんですよ」

「けれど鬼だとて親もあれば子も生まれ、そしたら当然情も通い合うと思うのにねえ」

「それは人の世の理屈、人の道であつて、鬼の道ではないんですよ」

「なるほど、鬼の道とは情の通じぬ道か、ならば人道に違背したとてせしめられないわね」

みすずは血の気の失せた顔で呆然と宙の一点に目をすえた。もはや涙も涸れていた。

「お方さま」

外の使いから帰ってきた汗衫姿の少女の里乃が入ってきた。

「安吉橋にはまだあの鬼が出ているそうですよ」

「まあ呆れた。これ程悪を働いたのだからいくら何でももう止めると思つていたのに」

左門が言うと、猿知恵よ、とみすずが応じた。

「えっ」

「猿、——いや猿じゃないわね。鬼よ。鬼知恵、私、もうぜったいゆるせない」急に立上がり決然と言ひ放つた彼女の切長の目が白く刃物のように光り、凝然とそこに立ちつくした。

その翌日から、これ迄とは別人のように彼女に生気が戻りてきばきと奉公人たちを差図しだした。鹿や猪の炙り肉、山鳥、雉子、琵琶湖でとれる鮎、鯉、モロコ、干魚などを好んで食ひ、あろうことか、女だてらに刀を手にして剣術まで始めた。

この時代はまだ剣術の流派など未発達で、世に知られた達人などもない。ただやみくもに刀を振る力まかせに木の叉木などを打ちすえるのである。くり返しているうちに手が木刀や刀の重さに慣れ、早く振れるようになり、また力の入れ所もわかつてくる。

「うちの北の方はちと頭が狂われたのであろうか」などと下人たちは小声で言う。

「伴侶に死なれて夜着の中でやるせない思いをしておられるのよ」

「仲の好いご夫婦だったからのう、お気の毒に」

しかしみすずは奉公人共のそんなひそひそ声は一切気にかけずひたすら刀術と馬術に精根をかたむけ続けた。馬術はさいわい夫の遺した駿馬生駒がいるし、剣術は寛治元年（一〇八七）の「後三年の役」に清原家衡を討つた源義家に従つて戦功をたてた小関保持という人物が一里東の天津に住んでいるときき、頼んで教えをうけた。保持は五十を過ぎて寡黙な男だったが彼女の真剣さに心が動いたらしく熱心に指導してくれた。

みすずは素襖、胸緒、袴、頭はみずら結いに被衣をつけ男のようなみなりで生駒に乗って保持の邸へ通つた。化粧気はないがきりりとした顔は凄艶で見る者をぞっとさせるような美しさである。

朝は乗馬の稽古ですごし、午後は剣の道に励み夜は書物を読んだ。物語の書写もやる。

種明が死んで半年が過ぎた。安吉橋には性懲りもなくまだ鬼が出没していた。よほど悪態無慈悲が好きで、しかも執念深い鬼らしい。災難に遭うのは東国から京へ上る旅人で、彼等は気の毒に何もしらずに橋を通りかかり鬼の餌食になるのであつた。国府は道端に高札を立て注意を促すが目を通さぬ旅人も多く、また字が読めぬ者も多い。

花の盛りの三月十日の夕刻、みすずは誂えた武具に身を固め、生駒に乗って家を出た。

めずすは日野川安吉橋。橋の袂のあたり、並足で馬を進めながら前方を窺うが乳色にかすんで何も見えぬ。夫の時とは季節がちがうのに夫の話した情景そのままだ。

左の腰の太刀の装着具合をたしかめ橋を進む。やはり橋の真中にそやつはいた。今日は単に水干をつけ袖托りの紐、水干袴を履き折烏帽子を被った商人姿の若者、なかなかの美男子だ。落着けつとみすずは自身を上げまし、生駒をとめてしげしげと相手を見つめ、そしてにっこりとはおえんだ。

もしと男は言った。

「かような所で日が暮れかけ難渋しております。その馬の後輪にお乗せ下されよろしいとうなずいておいて馬に一鞭当てた。馬は奔った。「待てッ」とうしろで声だし、追いついてくる鬼の生臭い鼻息が首筋にあたる。みすずと馬は一体、疾風の如く走り抜ける。

鬼は追いかけてつ手を伸ばして馬の尻に爪を立てようとした。とその掌がどういいうわけか、ぴたりと馬の尻にくっついてしまった。宙を飛ぶように走りつつ鬼は必死に手を離そうともがいた。「ヤッ」とみすずは気合いもろとも太刀をひき抜き横薙ぎにうしろを斬り払った。

鬼は絶叫と共に道にころび、生駒は尻に、肩口から斬り落とされた毛むくじやらの鬼の右腕をつけて走った。

みすずは夫からきいていた鬼の話から一計を案じて、太い糸で織った布で馬の尻を覆い固く紐で馬の腹に結えつけて布を固定しその布にべったりと烏糞を塗っていたのである。前に油で滑って馬をとり逃がしていたから鬼は今度こそにがすまいと強くつかもうとしたのであろう。

「夫の仇を半分討ってきました」

帰宅したみすずは奉公人たちに息はずませて言い、馬の尻にぶら下がっている鬼の腕を布ごとむしり取って庭に抛り投げた。

奉公人たちは吃驚仰天、あわててとびのいたが、怖いもの見たさ、すぐよってきてこわごわ覗き込む。人間の腕の三倍程もある鬼の腕など誰もが見るのは初めてだ。

「半分の仇討ちですか」

家扶の戸司森がいった。

「不満ですか」みすずが問う。

「いいえ、十分です」あわてて老人がこたえた。

「私もそう思います。鬼は多分長患いして、たとえ傷が癒えても生涯苦しむでしょう」

「仕返しにきますまいか」

「わかりませんからこっちも用心はしますが、おそらくそんな気力も体力もはやなくするものではありませんか」

「はい、それでも油断は禁物、鬼は人間以上に執念深いといえますから」

「そうね、ほんとに鬼というものは厄介。酷いことは平気でやるし人に化けるし、姿、形はおそろしい。おまけに嫉妬深くてすぐ人を恨む。扱いにくい事の上なしね」

「お言葉ですが嫉妬ぶかいのと怨みがましいのは人間とて同じ。私は七十七年生きてきてつくづくそう思います」

「そう。若い頃から色好みで鳴らしたあなたの言う事だからそのご意見は拝聴するとして、腕は鬼に返してやりましょう」

「えっ、返すんですか」

「持っただけでも仕方ないでしょう。それとも、何か使い途ある？」

「いいえ、いいえ。けれどどうやって返すのです」

「私に思案があります」

みすずは下人にふくだみた下等の紙と硯をもってこさせた。

「この腕返却致し候。早々にお引き取りありたし。赤鬼どの」
表通りの板扉に貼りつけ、その横に腕を荒縄でしばってぶら下げた。

「取りにくるでしょうか」と戸司森が訊く。

「来ます」みすずがこたえる。

「渡辺綱の故事をあなた、聞いていますでしょう。それに鬼はたいそう執着心が強いとあなた言ったでしょ」

「私が言ったのは執念深さです」

「どっちも同じでしょ」

言い合っているうちに表通りは人だかりがし、鬼の腕は評判になり、遠方か

らも見物にくる人がひきも切らない。

戸司森も渡辺綱の故事はもちろん知っていた。綱は今からざっと百年前に活躍した武勇隠れなき武将で摂津国渡辺に住んでいた。源満仲の子頼光に仕えていたが、京の一条戻橋で鬼に出会い、髻をつかまれたので名刀鬚切で鬼の腕を斬り放った。腕は記念に持ち帰ったが陰陽師の阿部晴明の勧めで七日間物忌みにこもっていたところ、ある晩彼の養母に化けた鬼がやってきて腕をとり返していったという。

さて尾立家の堀の腕は二日目の夜なくなっていた。貼紙はむしり取られて踏みにじられていた。戸司森はそれをみて鬼の怒りのすさまじさに身を震わせ邸の警護を嚴重にするよう手配した。

「いいえ、紙を踏みにじているのは鬼の絶望です。鬼は片手を失った上にそれを天下に公表されて採持まで傷つけられたのですもの」

「だから邸の警護を固めましょう。赤鬼が力をなくしていても仲間の鬼がくるかも知れません」

「いいえ、鬼の社会には仲間の為に一肌脱ごうとか皆で力を合わせようというような習慣はないようです。本来鬼は孤独な生き物なのだそうです。だからあんなに体が大きく力が強くても案外脆くて人間にやられるのです。大江山の酒呑童子だってそうでしょう。京の町に出て弱い者をいじめたり金品を強奪したり、一緒にわいわいお酒を飲む時は仲良くしていても、いざ危険が迫るとわれがちに逃げだすのです」

「お方様、鬼に関して、いつそんなに物知りになられたのです」

「この半年間、昼間は馬術と剣を習い、夜は鬼に関するたくさんのお話を読みました。少し前に出た『今昔物語』などお寺のお坊さんから借りて一心に読んで書き写しました。あの書物には鬼について膨大な実例が出ております。世の中にはこんなにたくさんのお話の鬼がいて闇夜にうろついているのか、文字通り百鬼夜行だと驚きました。あなたも、昔別れた女の思い出ばかりに耽ってないで少しは私の書写したもので読んで勉強なさったらどう？」

「おそれ入ります。それはそうとお方様、ご自分の婿取りはどうなさいます。お考えになっておられますか」

「そうね、このままというわけにもいかないでしょうね」

「もちろんです。尾立家の跡を絶やすわけにはいきません。」

「一族の人達とも相談してよい相手をさがしましょう」
「種明様の弟御などと、以前お方様はちらっとおっしゃっておられたようすが——」

「弟？」とたんにみずの形相が変わった。

「あの男の顔など絶対見たくありません。お前も私の前で二度とそんな事をいうのはゆるしませんよ。もし今度言ったら当家から放逐するからそのつもりでいなさい」

彼女のすさまじい見暮に驚いて戸司森は目を白黒してひき下がった。

終

参考資料

- 日本古典文学全集「今昔物語」第四巻 小学館
- 日本の歴史 ④「律令国家」 小学館
- 新総合国語便覧 第一学習社
- 日本歴史人物事典 朝日新聞社
- 世界大百科事典 平凡社



平成二十三年度

日本癌学会吉田富三賞を受賞して

崇城大学DDS研究所特任教授
熊本大学名誉教授(医学)

前田 浩

(栄栗市山崎町出身)

○はじめに

はからずも本年度の日本癌学会で最も荣誉ある吉田富三賞を頂き、永年の研究成果が関係者や当学会で高く評価されたことは研究者冥利に尽きる思いです。日本癌学会吉田富三賞は癌研究の泰斗、吉田富三先生の偉業を記念して二十年前に創設されたものです。吉田先生はとくに癌の化学発癌で吉田肉腫など有名ですが、癌化学療法法の嚆矢となる研究でも有名です。吉田先生は先の大戦末期に東北大学医学部教授に赴任され、そのあと、東大教授、癌研究所や佐々木研究所の所長も歴任されています。

さて、私の受賞理由は大きく分けて二点あります。第一点目は、ウイルスや細菌の感染局所で活性酸素や窒素酸化物が生成していることを発見したことであります。それによって、細胞(生体)が傷つき、さらに遺伝子が傷害を受けて変異体(細胞)が生じ、これらが薬剤耐性の原因になったり発癌の遠因となることであります。具体的な例としては、細菌ではヘリコバクターピロリ(胃炎・潰瘍↓胃癌の原因)や、肝炎ウイルス(肝炎↓慢性肝炎↓肝硬変↓肝癌)の慢性感染症を挙げることができますが、これらの研究は癌予防を考える上で重要な意味があることがわかります。つまり、活性酸素などを消去することによって炎症を抑える、あるいは炎症の慢性化を予防することにより、癌予防につながるができます。活性酸素を消去する物質は多くの植物性食品、例えば緑色野菜や果物、根菜類など(皮をむいて空気にさらすと次第に褐変するもの)、さらにお茶類、コーヒーや赤ワインに含まれているポリフェノールやフラボノイドなどに多く含まれています(参考文献1)。

受賞理由の第二点目は、癌治療に関するものであります。これまで、癌の化学療法において広く用いられているいわゆる制癌剤は、分子の大きさ(分子量)が水の分子量の十倍〜百倍位までで、一般に低分子化合物に属します。通常の抗生物質や、ビタミン剤はこの範疇(低分子)に入ります。また、抗生物質などの毒性は比較的強く、全身に均一に分布蓄積してもあまり毒性の問題はないのですが、それが制癌剤では様子が大きく異なります(後述)。これまでの低分子型の制癌剤はもともと猛毒の物質であるものが多く、全身に分布すると、普通の細胞の分裂や増殖にも作用します。とくに細胞の分裂が速い組織では強い毒性が出現します。例えば大腸上皮や造血臓器がそれにあたります。また、制癌剤のよく集まる臓器も問題となります。心臓によく集まるドキソルビシンという薬は強い心臓毒性が出現します。

○新しい制癌剤の発明と新しい癌治療概念の確立：EPR効果の発見と高分子型制癌剤による癌選択性の増強

これに対し、私の発見は、水分子の数千倍以上の分子量の大きい制癌剤を合成すれば、癌局所に極めて選択的に集まるといふ事実です。そのような高分子は正常組織や臓器には集まらない。そのため、薬効が癌部のみに発現するとともに、正常部組織に対する毒性を大幅に減らすことができるということです。分子量でいうと四万以上〜百万、あるいはそれ以上ということになります。この巨大分子量の制癌剤が固型癌局所によく集まるといふ現象に対し、我々はEPR効果(enhanced permeability and retention effect)と命名しました。その研究成果は一九八六年の米国癌学会のキャンサーリサーチという雑誌に発表しました。それから二十五年経った今でも世界の研究者がこのEPR効果という概念を引用しており、これまでの引用件数は、一昨年までに八千件を超えました。

しかし、多くの固型癌において、EPR効果は必ずしも均一には見られず、従って、高分子型制癌剤を用いても完全ではなく、問題であることもわかってきました。最近、投与方法をひと工夫することによってその問題が解決し、好成績が得られるようになりました。

○世界初の高分子型制癌剤スマンクスとその臨床応用

私達は一九七九年にネオカルチノスタチンという蛋白質性の制癌剤に高分子のスマレンマレイン酸コポリマーを結合したスマンクス（厚生省承認一九九三年）を合成しました。このものはもとのネオカルチノスタチンの百倍以上もよく癌部に集まることがわかりました。それをさらにリピオドールというケシ油のヨード化物（油）に溶かした油剤を作り、それを癌に栄養を補給している栄養動脈内に注入すると、癌部だけに二千倍も薬剤が集まることを見出していました。

例えば図1のように巨大肝癌に対し、カテーテルを用い、X線で透視下にモニターしつつ癌の栄養動脈（肝動脈）からスマンクスのリピオドール溶液を動脈

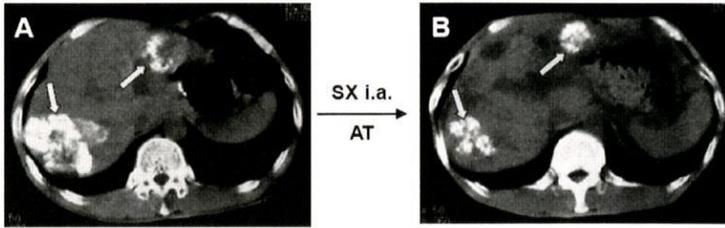


図1（説明）転移性肝癌のCT像。胃癌が肝癌に転移した患者さん（A）にスマンクス／リピオドール（約3mg）を血圧を上げた状態で動脈注射するだけで約1ヵ月半の間に大幅な癌の縮小がみられた（B）。白色部が薬剤を取り込んでいる癌部で薬剤は癌部に選択的に蓄積する。副作用はまずない。ATはアンジオテンシンを用い、血圧を15分ほど上げた状態で薬を動脈内に投与したことを示しています。

内に注入した場合、この薬が肝癌にピンポイントで集積されている様子をCT画像で見ることができません。癌部のみが白色に見えますが、それが本薬剤スマンクスが癌部に集積したことを示しており、その濃度は血中にある濃度の二千倍にもなるわけで、癌に対してのみ毒力を与えます。しかも、投与回数は初めのうちは年に数回（3〜5回）一年経てば半年に一回ぐらいの投与で癌が縮小・消失していくのがCTで把握できます（図1 B）。

最近、この方法をさらに改善した投与方法を考案しました。それはこの投与の施行にあたり、その患者さんにアンジオテンシン（AT）Ⅱという薬剤を静脈内投与して血圧を上げた状態で、例えば120mm

Hgを150mmHgにして行くと、この腫瘍集積性は一段とよくなり、転移性肝癌や胆のう癌・胆管癌、膵癌、腎癌などにも著効を示すようになります。このようなスマンクス・リピオドールは、多くの治療困難な進行した固型癌にも有効であ

ることが示されています。この薬はもとと肝癌用として厚労省で承認されていますが、他の腫瘍にも有効になるわけです。

スマンクス・リピオドールの投与ルートは動脈投与という手法によって行うため、一般の静脈注射などより少し技術を要します。このように手法が多少複雑な点が多く普及する妨げになっています。しかし、在来の治療法では治療が困難な癌患者を助けるためには医師側にもこのような技術を磨いて普及してほしいものです。

○癌は予防が一番

東京の（財）癌研究会のデータとして、癌の進行度別（ステージ別）の治療成績があります。早期発見による早期治療に関して言えば、胃癌、大腸癌、子宮癌、肺癌（気管支癌）などは外科手術で可成りの成功率になっていますが、胃癌Ⅰ期の治療成績は99.1%、Ⅲ期では45.9%が5年生存し、Ⅳ期では7.2%です。これは癌の早期発見がいかに重要であることを示しています。しかし、進行した癌になると手のほどこしようなのが現実です。家中が大火事になっては消しようがないのと同じです。従って、早期発見にこしたことがないので、それより癌に罹らないこと、つまり予防が一番です。

発癌のメカニズムをよくみるとはじめに記したように慢性炎症が強く関わっています。その背後には前述した活性酸素が発癌の大きな要因であることは間違いありません。化学発癌剤も体内のいくつかの酵素（例えばチトクローム還元酵素やNO合成酵素など）の作用で活性酸素を作ります。これが遺伝子を傷つけ、細胞は変身し、癌化に向かって進行します。しかし、有難いことに我々の身の回りの野菜などはその活性酸素を中和する成分をいっぱい持っています。お茶、コーヒー、赤ワインにもそのような成分が多く含まれています。

この流れの研究において、我々のところで昔風に製造したナタネ原油の中にキャノロールというフェノール化合物を発見し、その構造を決定しました。そのキャノロールをマウスの餌に加えると（乾燥した餌1kgに約1g）、胃十二指腸潰瘍や胃癌、大腸癌の発生頻度が三分の一に抑制されます。この成分はもととナタネ（種子）の中に存在してDNAやたん白質を保護するはたらき

をしています。昔ながらの製法で作ったナタネ油にはその成分が含まれていません。驚いたことに、市販のきれいな無色透明の精製ナタネ油にはこのような活性酸素を中和する力はありませんでした。つまり、これは癌予防の食品を考える上で問題で、さらにまた前述のように緑色野菜などの摂取が癌予防上、大切であることを意味しています。

○おわりに

私の研究室では上に述べたEPR効果を發揮する高分子ミセルで蛍光を發する薬剤を最近、いくつか合成しました。それを静脈内に注射すると数時間でマウスの癌部にそれが集積し、著しい蛍光がみられ、癌が容易に検出されるようになりました。これをヒトに応用し、新しい蛍光内視鏡を作製すれば、超早期の癌、例えば食道や大腸、膀胱あるいは腹腔内の癌がわかるようになると思います。さらにまた、この蛍光分子に光を当てるとそのエネルギーから活性酸素(二重項酸素)が生成し、内視鏡の光で癌を治療することが可能になる日があると思います。このような開発研究では多くの方々の多面的な協力が不可欠であります。現在、日本はもとより、国際的にも多くの仲間と連携して研究を進めています。

(参考文献)

- 1 前田 浩 著「活性酸素と野菜の力
— 21世紀の健康を考える —」
(発行) 幸書房(東京)(2007)

著者のプロフィール

兵庫県宍粟市山崎町川戸出身。昭和13年生れ。兵庫県立龍野高校、東北大学農学部を経てカリフォルニア大学大学院(フルブライト奨学生)修了、東北大学博士課程修了。東北大学医学部助手(細菌学)、ハーバード大学癌研究所研究員、熊本大医学部助教授・教授(微生物学)を経て、熊本大名誉教授、崇城大薬学部教授・同特任教授を歴任。日本細菌学会および日本癌学会名誉会員。(医学博士、農学博士)。

<賞等受賞歴>

米国サンアントニオ市名誉市長、オクラホマ州名誉州民、日本細菌学会浅川賞、高松宮妃癌研究基金学術賞、ドイツFrey Werle財団金賞、米国CRS学会賞、王立英薬学会 Life Time Achievement Award、CRS学会 College of Fellows、西日本文化賞(西日本新聞社)、日本DDS学会永井賞、日本癌学会吉田富三賞(平成23年10月)、その他受賞。

第三十三回春の芸能祭ご案内

日時 平成二十四年五月二十七日(日)

午前十時から

場所 宍粟市山崎文化会館(サンホールやまさき)
主催 宍粟市山崎文化協会・(財)山崎文化振興財団
後援 神戸新聞社・宍粟市教育委員会・宍粟市

会員の日頃の練習の成果を、ぜひご覧くださいませよう、
ご案内申しあげます。

参加部門 山崎詩舞道連盟 山崎邦楽の会

山崎日本舞踊の会 さつき民踊グループ

山崎民謡連合会

その他宍粟市内より賛助出演



短歌

揖保川を歌う

前田 ゆきこ

四方の山は、今まさに紅葉の真っ盛りで、さまざまに彩る樹々の姿は、この山崎町に住む私達を、居ながらにして大自然の中に憩わせ、四季の移り変りをつぶさに見せてくれる。

この山崎町の東方を流れる揖保川は、引原川・福知川・公文川・それらの支流を集めて、一宮町曲里に至り一級河川となり南下する。

険しい山川から、山崎町の十二波の辺りを超えると、ゆるやかな流れとなる。宍粟橋に立ち、北を見ると十二波の大岩小岩が見え、南を望むと穏やかな流れを目のあたりにすることが出来る。

この揖保川には、昔から灌漑、漁業、交通、又近年では引原ダムによる発電等々、深い恩恵を享けてきた事は町民周知のところであり、揖保川を飯穂の川とも呼ぶと聴けば、祖先が如何にこの川を大事に思い、敬愛の念をもって接して来たかが伺え

今更の様にしみじみとするのである。

又昭和の始めより、町民に愛唱された山崎小唄は、野口雨情作詞、中山晋平作曲によるもので、今も山崎文化会館前の碑いしがきに刻まれている。

水にせかせて十二波よ

流す筏はサツテモナ

流す筏はさきまかせ

当時の情緒ある風景が偲ばれる。

山崎小学校の運動会応援歌にも

清き流れの揖保の川

早瀬の響き絶え間なし

とあり、揖保川が住民の心に深く根ざしていることを物語っている。

さて揖保川は、短歌ではどのように詠まれてきたのであろうか。私のせまい見聞では測り知れないので、先ず手近の私の所属結社「綱手山崎歌会」(一葉会)に出詠された中から、掘り起こしてみることにする。

。早朝より名古屋ナンバー揖保川の

ほとりに止めて糸垂らしおり

小林ハマ子

。地を叩き噴きあがる豪雨二時間余

鉄砲水はわが村を呑む

森下 逮子

。山崎の町に入れば流れさえ清らに見えるふるさとの川

本城 美幸

。ゆるやかに来たれる水は喚声をあげて堰堤を越えてゆきたり

山崎 智絵

。兩岸に中州に黄の花咲き満てり揖保の流れに影をおとして

横野 光子

一首目は、名古屋ナンバーを見ての驚き、二首目は恐怖を、又、古里

山崎に入ると揖保川が清らかな流れ

になると、詠っているのが嬉しい。

堰堤を超える流れの静と動を、又春

の情景を詠っていて、それぞれに揖

保川の表情の変化が歌われている。

そこでこの町の、昭和のはじめよ

り、短歌において多くの弟子や後輩を育成された、お三方の短歌を紹介

させて頂きたいと思う。

。現在が刻々過去に移りゆく大川のほとりに立ちてしばらく

安井俊二氏『安井俊二歌集』

。いのちあるものの声かと雪の下ふるへて水の流れゆく音

藤村省三氏『雪の音』

。山が投げ合う影の移りつつ親し

もよ森林王国宍粟

稲村幸子氏『橋掛り』

多くの秀歌の中から、批評眼を持たぬ私が選ばせて頂いたので、或いは、批判をまぬがれないかとも思う

のだが、どうかお許しを願いたい。

安井俊二氏も藤村省三氏も、今はずでに此の世に亡いが、稲村幸子氏は百一歳のご高齢ながら、歌誌『夢』の代表歌人の筆頭に、名を置かれている。さすがに歌柄の大きいこと、

広い視野から来る豊かなものを、読後に頂いた。

この度、山崎町を代表される歌人の残された歌集を開くと、なんと生き生きと、在りし日のその時々が詠い込まれている事か。深い短歌の力を今更のように思うのである。

このように過ぎ去った日々は返すことが出来ないように、揖保川の水の一滴も源に還ることはない。

けれど今日は今日の流れに人々は癒され、立ち止まり、その感動を詠まずにいられなくなるだろう。この町をめぐる山の峰々と共に、何時までも清らかな揖保川であってほしい。

私も非才ながら、この山崎町の風物を、出来る限り短歌に残してゆきたいと切に願っている。

。牛馬塚この百年を見つめ来し日々
に新しき流れの岸に

前田 ゆきこ

短歌祭入賞入選作品

◇第七回六粟市市民短歌祭

(九月十三日・六粟防災センター)

。兵庫県知事賞

土と生き土しかしらぬ父母逝きて
いつしか吾も土と生き居り

門積 健三

。兵庫県議会議長賞

夕食は夫が作りてくれるといふ
レーのレシピ貼りて出掛くる

釜付 靖子

。神戸新聞社賞

朝採りの野菜のならば道の駅「青
虫おまけ」と駅長の言ふ

佐伯恵美子

。六粟市長賞

虫喰うは有機野菜の故なると詫び
状添えて宅配届く

大穂ひろみ

。六粟市議会議長賞

にこやかに看取りてをれば臥す母
はおだしき視線に笑み返しきぬ

芦谷 孝子

。六粟市教育委員会教育長賞

このおにぎり被災の人にあげたい
と曾孫が語る夕餉のひととき

和井 一栄

。六粟市文化協会会長賞

据わりよく使い慣れたる重石さえ
手強きもの一つとなれり

安原 定子

。六粟市歌人連盟賞

揖保川の瀬音ベースにかじか鳴き
奏でてみまず初夏のうた

大井 千明

早苗田の植ゑつき終へて昼下り手
よりかすかに泥の匂ひす

藤原みよし

景勝を誇りし浜辺の松原に一本残
る松の沈黙

森元 信代

百歳までも生きては困ると思いつ
つ今年も受ける癌の検診

高路ひろみ

おばあちゃん先の地震大丈夫と
息急ぐ孫の電話かけ来る

石原 悦子

山桜すこし遅れて咲き出でてはず
かしそうに人目ひきををり

大倉 絹代

こんなにも広がったんだ妣の部屋
空のベッドが真ん中にある

田淵 和子

落とす葉をみな落としたるすがし
さに銀杏大樹は冬の日を待つ

山本 正子

登下校の長き行列懐かしき今三人
かとながく見送る

植木 操

この三年いよよ延びたる杉木立畑
のわが影すっぽり包む

岡田 康子

・六粟郡民短歌祭発足二十五周年に
当り、楠田立身先生をお招きして
表彰式の後記念講演をしていただ
きました。

◇西播磨短歌祭(平成二十三年度)

。兵庫県生きが創造協会理事賞

ブラウスの釦上から二つ開けた
しのハートに春風誘う

南光美代子

。西播磨県民局長賞

腰曲げて老が畑打つ鍬の音のち
耕す音とぞ思ふ

岡本 光代

。佳作

合宿に大きなリュック背負いいる
爺に似て来し孫を見送る

西川スズ子

田の水を日に幾度か見て廻り出穂
と語りぬこれが百姓

杉本 幹子

。学生の部(県立山崎高等学校)

・佳作
帰り道夕日に染まる赤蜻蛉私の影
を闇へ連れゆく

村上 祐美

◇つくつくぼっしの会詠草

岩上のせせらぎに差す合歓の花風
に揺れつつ夜は眠るのか

嶋田 操

秋景色良しと車を走らせる紅葉を
窓にとり入れながら

杉本 幹子

雨樋に柿の葉一枚いすわりて水の
流れに抗いており

南光美代子

流行語なでしこジャパンは一位な
り誉れも高く五輪を目指せ

西川スズ子

葉を捧げ伸びつつ太る白大根わた
しが蒔いたと嫁の喜ぶ

土方 君子

今一度行きたく思う上海に心に残
る人達ありて

三浦みさゑ

今日の花明日咲く蕾したがへて皇
帝ダリアは天空に咲く

栗山 節子

俳句

大歳神社へ吟行

青嶺句会 杉山美保子

青嶺句会、恒例の春の吟行。

今年は大歳市民なら誰もが知っている「千年藤」で有名な大歳神社へと出かけた。

「千年藤」は、兵庫県の天然記念物に指定されている。樹齡が約千五十年、根回りが約二、八メートルのそれはそれは見事な巨木で、さすがにわが郷土が誇る名木である。ちなみに「かおり風景百選」にも認定されている。

境内いっぱい広がる花房は、見る人の心を惹き付けてやまない。

そこでしばし句作に耽る。

・藤かづら天蓋に座す石の亀

光子

・神苑は甘き香りの藤の花

延子

・千年藤十分の一生きぬかん

緑山

・千年を垂れて賑はす藤の花

茂太

・幾千の花房揺るる藤の宮

美保子

・木洩れ日に藤千年の優雅みせ

良子

・咲き継ぎて一千年の藤匂う

チエノ

・咲き満てど奮りはあらず神の藤

とみ代

・軽やかな朝の光に藤薫る

ゆき

・花盛りふれ合う藤の香をこぼし

栄子

・ほんのりとおう藤の香千年を

幸子

・藤簾千年の房仰ぎみて

明美

・浮雲をゆらりと映し水温む

駆雲

伊沢の里で昼食後、句会を開く。

永井とみ代様の披講のあと、談笑し

和やかなうちに散会となる。

吟行日和に恵まれ、感謝をしつつ

家路に着いた。

青嶺句会詠草

・年重ねお洒落気もなく着膨れて

大谷 延子

・誰れも名を知らず愛しき草の花

門積 緑山

・冬ざれて河原は水のかくれんぼ

茂田 茂太

・船頭も魚釣る人も着膨れて

杉山美保子

・ダムに彩映しゆるりと山眠る

田中 良子

・ゆったりと老婆着膨れ笑顔よし

鳥羽チエノ

・着膨れて頑固親父も丸くなり

永井とみ代

・間延びした呼び声流し焼諸屋

原田 駆雲

・着膨れて母似となりし姉妹

三浦 ゆき

・白壁に影の遊べる吊し柿

山口 榮子

・久々に尋ねし友も着膨れて

若松 幸子

・着膨れて鏡の前を右左

渡辺 明美

・肩書の取れし翁の着膨れて

秋久 光子

さわらび句会詠草

・年明けぬ龍の眼光輝きて

小林 紫生

・旅に逢ひ縁をつなぐ賀状かな

庄 昌子

・紅葉誘ふ誘ふ友あり山頂へ

壺阪加代子

・ぴかぴかの子供御輿や秋日差

本條 淑子

・冬晴れやどんと吹き出づ桜島

薄木満寿恵

・柚子の皮干に切る手に香の染みて

山岸その子

・早々と閉ざす雨戸や冬夕べ

川崎 栄子



山脈句会詠草

- ・隠れ耶蘇の墓の翳濃き朴落葉 浅田 蕪耕
- ・黒大豆刈りて今年の農事終ふ 池田 陶瓦
- ・形よき紅葉句帳の葉とす 稲田 富子
- ・掛香の紐の褪せたる月日かな 宇野 幸子
- ・水底に小魚の影水温む 栗山きよみ
- ・牡蠣舟の点り更けゆく船場川 田中めぐみ
- ・畑や今冬の眠りに入らんとす 西田 宣子
- ・日に追はれ老に追はれて毛糸編む 福田 祥栄

白牡丹句会詠草

- ・大いちょう薄もみじして雨の中 井口 洋子
- ・彩りの残る野山に冬の風 田中 慶英
- ・鈴生りの入り陽に映える柿明り 鳥羽 千恵
- ・草臥れし仁王のわらじ冬に入る 松本 壽子

秋茄子の色得て幸を感じけり

- 三浦 ゆき
- ・見なれたる山重なりて寒に入る 宗平 圭司
- ・秋空に午後はふんわり真綿雲 福井 清翠

しそう笹ゆり句会詠草

- ・孫駆ける髪なびかせて刈田道 矢野登次郎
- ・幼子も共に歎声鱈雲 内藤 裕子
- ・新米に子等の食欲伸び盛り 谷口 昭子
- ・秋の色分かつ山稜伯耆富士 田中 慶英
- ・背を正し冬夕焼に見とれけり 竹添寿美子
- ・ジャンプして手が届くかな冬の虹 垣内 安代
- ・透きとほる生の掛軸紅葉燃ゆ 小田 朝子
- ・一朝の日照雨に光る冬紅葉 宗平 圭司

山崎みやこ句会詠草

- ・思ふこと言い出せぬまま冬ふかむ 土井 洋美
- ・カレンダー残る一枚穂やかに 竹野 脩子
- ・電線に並びてふっくら寒雀 坂井 弘昌
- ・寛ぎし秘湯の宿に風花す 坂井 久栄
- ・静寂の庭に真っ赤なひめつばき 坂井小百合
- ・延ヶ滝悲恋を語る冬蓐 坂井 恵子
- ・山道を通せんぼする紅葉かな 是兼 妙子
- ・ひとときの夕日に映える紅葉山 東 田鶴子

五色しそう句会詠草

- ☆大阪四天王寺吟行
- ・師が結ぶ春の一会や大伽藍 秋久 光子
- ・楠落葉太子の祈り地震の地へ 三浦 雪
- ・朱の回廊めぐりて花の仁王門 井口 泰子
- ・引導の音鳴り響く春の空

夕桜匠たたずむ天守閣

- 富井 幸子
- ・被災地の満中陰や花は葉に 西川 照義
- ・遣唐使訪ねし寺や風光る 大西 敦子
- ・大地震に桜吹雪の涙かな 角野桂治郎
- 福元 敦子



随想

「突然思い出した真珠湾攻撃の歌」

三宅 哲朗

昨夜（十二月九日の夜）は、十時半頃寢床に入ってから、なかなか寢付かれず、半分ウトウトしながら脈絡のないことに思いをめぐらしていたのだが、突然ある歌詞がメロディーと共に頭の中に浮かんできたのである。これは何の歌だったかなあーと反復しながら頭の中で口ずさんでいると、次第に歌詞の細部まで全部思い出して、ああそうだ、子供のときにそれも日本が太平洋戦争に突入した真珠湾攻撃のときに、その戦功を称えるために作られた歌だったのだと思い至ったのである。

あれは忘れもしない昭和十六年十二月八日、日本軍の奇襲による真珠湾攻撃であった。

当時五歳の私は、その日の夕方、父と兄と私の三人で風呂に入りながら、日本はすごいなあー、やるもんじゃなあー、戦争に勝てるぞー、というようなことを父と兄が上気しながら話していたように思う。とにかく三人で風呂に入っただけ高揚した気分ですのような話をした場面は、これまでも自分の中で何回となく思い出していたことは間違いない。

ところが、昨夜思い出したこの歌は、前後に何の兆候もなく、約七十年後の昨夜、突如として現れたのである。

なぜ、こんな歌が突然飛び出してきたのだろうか。どう考えてもよくわからない。不思議である。ともかく思い出した歌を夜中のうちに忘れてしまったらいかんと思ひ、寢床から起き出して紙片にメモしておいた。それが次の歌詞である。

♪ 新聞読んで 父様は

ひびきを叩いて おっしゃった

あの十二月八日の日

太平洋の真ん中で

大きな手柄をたてたのは

若い九人の勇士です

朝起きてすぐ、昨夜記しておいたこの歌を声を出して何度か歌うことができたので、ゆうべのことは夢でなくてよかったと安心したし、この歌詞もたぶん大きな間違いはないと思った。

それにしても、遠い昔に覚えた歌が、なぜ、今頃になって、それも七十五歳の後期高齢者というれっきとした老人になった私の脳裏に突然はつきりとよみがえってきたのだろうか。不思議なことである。

昔から言われた諺に「三ツ子の魂百まで」というのがある。しかしこれも厳密に言えば幼児からの性質は年をとっても変わらないという意味合いであり、記憶云々の話ではない。

七十年前の真珠湾攻撃という強烈な印象が、その歌を伴って当時五歳の私の脳裏に焼きついて、その記憶が頭の片隅で永年にわたりひっそりと、しかも確りと残っていたのであろうか。そのへんまでは私にも推測がつく。

ところが、なぜ今になって真珠湾攻撃という強烈な戦争のことではなく、それに関連する歌が急に飛び出てきたのだろうか。それがわからない。

そういえば一昨日（十二月八日）は、戦後七十回目の開戦記念日であった。新聞やテレビが取り上げたからそのニュースを私も見たが、毎年のことだし、ああそうか程度で受けとめて、それ以上のことはなかった。だからきのう突然古い歌を思い出したときも別に一昨日の開戦記念のことは気にとめなかった。ただ考えるのは古い歌の記憶が出現したことに對する不思議ばかりであった。ところがである。

この不思議話は、不思議なことにまたもや別の偶然と繋がってきたのである。私は夕食が終わって、今日（十二月十日）のテレビで面白い番組はないかな

あといつものように新聞の番組欄を見ていて、アッと驚いた。今夜九時からNHKテレビで「真珠湾からの帰還」というドラマが放映されることになっているのではないか。しかも、その番組の概要を紹介する記事が写真付で載っているのである。その内容の一部を紹介すると「……一九四一年十二月八日、日本はハワイ・真珠湾の米軍を奇襲し、太平洋戦争に突入した。攻撃に参加した特殊潜航艇五隻の搭乗員は、十人中九人が戦死。生き残った一人は日本人捕虜第一号となる。このドラマは、実話を基に作られた……」とある。なんと、昨夜寝床で半分まどろみながら突然思い出した古い歌詞の「若い九人の勇士です」とピタリと一致するではないか。因みに戦死した九人の兵士は軍神として靖国神社に祀られ、全国民からその勇氣と栄誉を称えられたのである。

昨夜から始まった私の不思議話が、早くも、つぎの不思議な偶然ともいえるテレビドラマの事実につながってしまったのである。私は九時を待って神経を集中してこの番組を観た。ドラマの主人公になった俳優の鬼気迫る演技と、全体の構成の確かさから、このドラマの主題ともいえるべき戦争における生と死について否応のない強迫性というか不条理が見事に描かれており、見ごたえのあるものであった。

私の古い記憶のよみがえりという不思議は、この番組をタイミング良く観ることができてそれは幸運であったというべきか、はたまた不思議な偶然であったというべきか、いずれにしても私はこの番組を観てなにか救われたような気分になったことも確かであるが、それでもまだ五十%ぐらいは、不思議は不思議のままである。

(平成二十三年十二月十一日記)



山崎文化協会
山崎郷土研究会

合同研修旅行 に参加して

山崎郷土研究会

宗平圭司

平成二十三年年度の研修旅行は、昨年十月二日(日)岡山県吉備の里へ両会員合わせて四十四名もの参加をいただき、次の名跡を訪ねた。

◇旧足守藩侍屋敷等の散策

羽柴秀吉の妻ねねの兄木下家定の子木下勝俊が、関が原の後住んだところである。公園としてよく整備され、城下町としての雰囲気都十分残されていた。

◇高松城址

天正十年(一五八二年)羽柴秀吉による水攻めで有名な城址には、清水宗治の首塚があり、又近くの蛙が鼻には築堤址が残され、当時の様子を垣間みる事が出来た。

◇備中国分寺散策(参拝)

◇吉備津神社

「真金ふく吉備の中山」と歌われた吉備の中山のふもとに位置する吉備国の総鎮守で、祭神は吉備津命。

比翼入母屋造りの本殿及び拝殿は国宝で、拝殿より南に続く長い回廊を経て右手に見える入母屋造りの建物は、鳴釜神事で知られる釜が終日焚かれており、死後もうなり声を続けた温羅の首が竈の下八尺に埋められ、今もうなり声をあげ、吉凶を告げると伝えられている。竈にかけられた釜が大きく鳴れば「良い知らせ」音が低かったり鳴らなかつたら「悪い知らせ」と言われている。(上田秋成の雨月物語に出てくる)

◇鬼ノ城址

誠に残念であったが、大型バスが進入不可能で中止となった。歩けば片道三・四十分かかるとの事で、時間の余裕もなく、参加者の期待を裏切り申し訳なくお詫びします。

当日は多数のご参加を頂き、天気もよく古代吉備王国を満喫して頂き、有意義な研修を終えることが出来た。



吉備津神社の回廊

巨木めぐり

山崎植物同好会 事務局 伊藤 一郎

平成二十三年度の締めくくりは、日本一の大杉見学です。高知県大豊町へ会初の一泊の研修旅行を行いました。参加人数は十三人と少なかったのですが、大変盛り上がった会となりました。一同大杉に感嘆し、眺めては木の周囲を歩き、杉の肌にふれました。生命の泉がわき出でる思いに、時の流れを忘れました。

植物同好会が巨木めぐりを始めて、すでに十数年が過ぎました。古池先生の指導で、宍粟市内の巨木めぐりを手始めに、近隣市町の巨木を観察してきました。巨木を眺めると、心身が落ち着き深い静寂を感じる事が出来ます。これらの木々が、いつまでも存在することを切に願うものです。

私の子供の頃の山崎小学校は、大きな木に囲まれた自然豊かな学校でした。大楠木は切られ、プールとなり、巨木のポプラ並木は全て切られてしまいました。なぜ残す努力をしなかったのか、とても残念に思いますが。私自身は、あの環境の中で育ったからこそ自然の大切さを学んだのだと思うのです。

いま、宍粟市は、鹿の被害により

生態系そのものの崩壊が進んでいきます。国見の森指導員の坂本先生のお話によると、生態系の頂点が狼で、底辺が植物とのことです。狼がいなくなり、鹿が大繁殖し、鹿を捕らえる猟師も激減したため、鹿の食べる植物が絶滅の危機に陥っています。植物の植生が変わると、小さな虫などに変化が起き、それを食べる鳥などにも影響を及ぼすと私は思うのです。自然環境を大切に思うなら、いま私達が手を打たなければ、この豊かな宍粟市の自然を守ることは出来ないと思います。



巨木めぐりから変な所に話が飛んでしまいました。これからも大きな木々の見学は続くと
思います。
ぜひとも皆様の参加をお願いいたします。

齢六十の新潮会

新潮会

谷 笹利通

「おんぶに・抱っこに・おしっこ・これでは月例会に出席しても皆さんに迷惑をかけるし、会員でありながら例会に出ないという事は私の心情が許さないので退会をさせてほしい。」T氏が、昨年最後の例会で椅子からやおら立ち上がりこのように発言をされた。氏は今年六十周年を迎えた新潮会発起人の一人で、大正元年生まれ百歳の大先輩です。足は少し弱られたが頭脳は明晰であり、慰留に努めたところ退会はせず休会で仲間として残って頂く事になり安心して居ります。本年十一月に予定している六十周年記念式典には特別席に着いて頂き百年の凝縮された珠玉の言葉を聴けることをとても楽しみにしております。

私は入会九年目の新参でありまして、先行する五十一年間の充実した歴史については緒先輩より聴かせて貰ったり、五年ごとの記念誌により知りました。以下、六十年にわたる活動の一部を紹介させていただきます。

周年記念事業で主たるもの

一 十周年記念植樹(図書館前)

一 二十周年 山崎町民憲章碑(役場前)

一 三十周年 絵画寄贈(文化会館内)

一 四十周年 歌碑—山崎小唄・さつき音頭・山崎町歌—(文化会館前)

一 五十周年 夢の響き手動カリヨン八鐘(夢公園)

一 六十周年記念事業は未来を拓く子供たちの理科(科学)教具の寄贈を計画中です。

他にも吉川栄治氏より「山崎闇斎の木像」が寄贈され、同氏による直筆の「奉献の辞」碑、また歌人川田順氏の歌碑、この二つを闇斎神社境内に建立するにあたり新潮会は中心的な役割を果たす。

記念講演も著名人四十数人を招いています。ちなみに作家吉川英治、評論家大宅壮一、狂言師茂山千作、作家長与善郎、俳人・歌人・詩人・洋画家等多岐に亘り、先輩会員の交流の広さと取り組に頭の下がる思いです。

六十年の歳月は流れていますが、ものの本質は不変です。温故知新、継承されたこの真摯な取り組みを今後生かし、会を発展させて参る所存です。

新潮会の次なる大節は四十年先の百周年記念、盛大な記念大会を開催したいと想っている、私は齢百十七歳となっているだろう……。

困碁つれづれ

山崎開碁同好会

荒木俊介

今昔物語の中の話である。

平安朝は醍醐天皇の頃、内裏にも出入りを許されていた高僧で碁聖とまで言われた碁の名人がいた。名を寛蓮といい、知恵者でもあった。

ある時天皇との賭け碁で金の枕を得て帰る途中盗賊に襲われて奪われるが、天皇の指しがねと気付いた寛蓮は次の賭け碁の日、偽の金の枕を用意し、案の定襲ってきた盗賊にそれを基金に弥勒寺を建立したといわれている。

或る日内裏を辞して帰る道すがら女童から主が碁の手合わせをしたいから邸までお越し願えないでしようかと誘われる。言葉づかいといい、賤しからぬ身なりである。誘われるままに邸に着くと、ある奥まった放出（離れ座敷）に案内された。麝香の香り漂う簾の前に既に碁盤と碁笥二つが用意されている。やがて簾の奥に女人が現れて

「先ず初めに私が先で打って、その結果を見て手合いを決めましょう」という。それもいいことだと思っ

ていると、女は自分は簾から出ずに巻数木という白木の棒で初めの黒石を天元に置けと指し示すのである。

こうして寛蓮は指し示されるままに黒石と白石を交互に並べるうちに寛蓮の白石は殆んど死んでしまった。

怨霊の祟り、妖怪変化、物の怪といったことが素朴な地下人は勿論、高い教養のある宮廷人たちまでもが信じていた頃のことである

「これはきつと物の怪の仕業にちがいない」

と噂は忽ち都中に広まった。

しかし、この噂話、現代の文明社会の口さがないマスコミが取り上げたら

「麝香の香り漂う簾の奥の女人の姿にさすがの名人も心奪われての不覚に違いない」

とジョーク交じりの評をするのでは。



自然の中で文化

を考える

山崎茶華道協会

中津 八重子

このたび寄稿の依頼を受けました。私にはそのような文才もなく、ただ思いつくままに筆を執らせて頂きます。

一口に文化と申ししても、有形無形多岐多様にわたり、さしたる素養もない私には程遠い言葉のように思われます。ところで、この宍粟市には、昔今を問わず、文化面での偉業を遂げられた方がたくさんいらっしゃいます。その方々の作品・功績・プロフィール等を一堂に寄せて、展示公開できる施設があればいいなど日頃から思っております。私達もそこに集い、その方々の偉業に思いを巡らせ、感性を磨きたいものです。そして、そのようなすばらしい方々を生み出した宍粟の地を誇りに思いたいものです。

思うに、私達は日々の生活をこの宍粟の美しい自然の中で営んでいます。しかし、あまりにも近すぎて見えていない物がたくさんあるのでは

ないでしょうか。たとえば、名所、旧跡、資源、伝統行事などです。もっともっと現実の姿や状態を知り、まだまだ埋もれているそれらを、大切に保護し生かしているってはどうかと思うのです。そうすることで、また新たな宍粟のよさを発見し、よりこの地に愛着を持つことができます。

この地に生かされている毎日を感謝できます。最近、隣近所のふれあい希薄になりつつあります。地域の人々が親睦を図り知恵を出し合う場、意見を交換し合う場を残していつこそ、その土地やそこに住む人へのやさしさや思いやりの心が培われていく。そして、地域の絆も強くしていけるのではないのでしょうか。この宍粟の地が、ますます物心共に豊かで温かい、安心して暮らせる生活環境になればと思っております。そのように考えると、その土地の人々の日々の生活そのものがその土地の文化であるとも考えられます。この文化をいい形で次の世代に伝えることが、私達の責任であるのではないのでしょうか。

これからも、私なりに自然とふれあいながら、日々の暮らし方を考えていきたいものです。

宇原獅子舞が私に 教えてくれたこと

宇原獅子舞保存会
会員 井口浩一

私の生まれ育った宍粟市山崎町の

宇原は、豊かな自然に恵まれ多くの作物が実り、人々の生活を支えてきました。そして、先人たちは宇原岩田神社に毎年の五穀豊穡を祈願するため、百五十年以上前より獅子舞を奉納してきました。宇原獅子舞は、全国でも数少ない毛獅子で十二種の舞があります。獅子頭は黒漆の上に金箔が施され、体は紺木綿布に馬の鬣たてかみが縫い付けてあり、低い姿勢で幻想の生き物が実在しているかのようには舞うのが特徴です。村のお祭りで獅子舞がある時は、太鼓と笛のはやしに引き寄せられ年齢関係なく村人たちが一斉に揃います。世代を超えたコミュニケーションがあり、会場は温かい笑顔に包まれます。宇原獅子舞保存会のメンバーは、一人でも多くの人たちの心に響く獅子舞を披露したいと願い稽古を重ね、本番に挑んでいます。

私が子どもの頃、獅子の迫力と豪快な雄姿が、何より恐ろしい存在で、

獅子を見る度に涙を流して母親の影に隠れていました。しかし、青年になり、父親たちが郷土を想い汗だくになって獅子を舞わし笛を吹いている姿に、憧れを感じるようになりました。そして、私も獅子舞を通して郷土の笑顔を守りたいと思えるようになりまし。

私にとって、宇原獅子舞は郷土の自慢です。祖父から父親へ、そして父親から私と弟へ、宇原獅子舞への熱い情熱と伝統は引き継がれています。また、それだけではなく、祖父世代から、親父世代へ、そして私の世代に引き継がれている宇原獅子舞。それは、村の人々を強く結びつけてくれる絆と郷土愛だと信じています。宇原獅子舞には、ふるさとを大切に想う皆の気持ち一杯詰まっています。そんな想いを、今度は私たちが次の世代へ伝え、郷土を笑顔で染めたいと願っています。



1994年4月【総社】
演目：神楽



2008年10月【宇原岩田神社】
演目：梯子



2011年10月【宇原岩田神社】
演目：宮入

定着した 「コンサートの夕べ」

昭和会
平山憲二

昭和会は宍粟に在住する蛍雪の友が相集い、昭和三十二年に発足しました。その後、友が友を呼び、すでに五十四年を経過し現在に至っています。

この会の目的は高遠な主義・主張を求めためではなく、まず気軽な仲間集いの中で自然発生的な時機に応じた課題を追求していこうとしています。

毎月一回の例会をもち、会員の研修や親睦を深める機会としています。講師は会員が務めるか、あるいは外部から招聘することもあります。

その中で毎年九月の例会は家族例会とし、会員家族を伴い、また物語者の家族や関係の人たちにもなるべく参加していただき、旧来の友情を育む和やかな会になっています。

最近の家族例会は波賀フォレストステーションを会場に初秋の夕べをコンサートで楽しむことにしています。

これまでのコンサートでは、モン

ゴルのホーミー、フラメンコギター、ジプシージャズ等の演奏で楽しみ、それぞれの民族音楽のもつすばらしさを満喫してきました。

本年度はコンサート出演者七名のみなさんがすべて宍粟出身か、宍粟にゆかりのある方ばかりという巡りあわせで、心とらいた雰囲気になりました。

宍粟にも音楽を学んでいる人の多いことを改めて認識しました。

ピアノ、マリンバ、クラリネット、ヴァイオリン、ギターが織りなすすばらしいアンサンブルにうっとりとして酔い、また、「わらべ唄」や「日本の四季メドレー」の演奏が始まると会場がコーラスの場になることもあり、手拍子も加わり楽しいひとときを過ごしました。

来年はどんなコンサートに出合えるか全会員が今から期待しています。

年一回の家族例会がいつまでも継承され、家族ぐるみの親睦や研修に繋がることを切に願っています。



平成23年9月25日
波賀フォレストステーション
宍粟ゆかりの演奏者

定期演奏会を終えて

山崎児童合唱団

堂田 萌

今年のミュージカルは「八方にらみねこ」。私の役は、「ミケ」でした。初めのうちはよく先生に注意されたり、失敗が多くて、「本当にできるかなあ」と思っていたけど、だんだん自分の役にもなれていきました。そして迎えた本番。とても緊張したけど、最後のステージは大成功でした。先生方、今まで本当にありがとうございました。うございました。

合唱をするということ

山崎児童合唱団

上山 千陽

「心を一つに。」と先生によく言われます。私はみんなの声をききながら、心を込めて歌います。みんなの心が一つになったとき、いい声が出て、歌っていてもとても気持ちがいいので、心がスーッとします。お客さんが笑顔で拍手してくれるのを見

て、感動してもらえたかなと思います。これからも笑顔になる魔法をかけたいです。

卒団すること

山崎児童合唱団

杉山 華音

私は四年生の四月にこの山崎児童合唱団に入団しました。合唱団では毎年「定期演奏会」があります。私は、卒団セレモニーで今年卒団しました。私にとって卒団するということは二年間歌ってきた歌とお別れすることです。たったの二年間だったけど合唱団の友達と一緒に歌ったり劇ができて良かったです。



芸能祭とボランティアに

さつき民踊グループ

福原 良子

仕事一筋で何の趣味もない私でしたが、芸能祭を見せて頂きワーア皆さん素晴らしい事をされていると感激しました。皆さんが楽しくいきいきと踊られるので、私もしてみたいと思いましたが、手を使う事も、歌う事もダメな私、でも民謡の踊りが好きになり身近の人に話をしますと、さつき民謡の先生は岸本さんと聞き、近所なのに踊りをされているとは全然知りませんでした。立派な「阪東寿賀幸」と言う踊りの先生と聞き、早速お願いしますと、心よく承知して頂きました。さつき民踊グループの皆さんも温かく心よく承知して頂き、早くも八年が過ぎました。芸能祭だけと思っていましたが、ボランティアにも参加と聞き頑張りなくてはと思い頑張っていますが、手足がついていかず間違った、忘れた、と甘えています。芸能祭の後は、知っている方々から「見せてもらって良かったで」と、言って下さると穴に

入りたくらい照れくさいですが、踊っていてよかったと思います。ボランティアに行くとき皆さん手拍子や、知っている曲が流れると、歌って下さったりしてアンコール、アンコールと、かけ声をかけて下さったり、「また来てね」と言って下さると、私達はうれしく皆さんの顔は笑顔、笑顔です。本当に踊りの仲間に入れて頂きよかったです。又緊張感と、ボケ防止のために頑張ります。これも私だけでなく家族の健康と理解があつての事、さつき民踊グループを代表して、会員の家族に感謝、感謝、感謝です。



長谷川等伯と

「松」

山崎美術協会
藤原義弘

「松」は日本の風景や行事には欠かせない存在である。また昔から巨匠とよばれる画家たちが題材としてよく扱っている。

何年前のことであるが、私は「没後四〇〇年長谷川等伯展」を観るため京都国立博物館の庭園にいた。居るといふより長蛇の列の後尾に並び、入館を待たされていたと言うほうが正確である。二時間以上は待ったと思うがようやく入館できた。会場内は満員状態で、背の低い私等には人の頭ばかりが目立った。

長谷川等伯は、能登の七尾に生まれ、はじめは絵仏師として仏教絵画を描いていたが、三十歳代になってから上洛し、本格的な絵師の活動を始めた。だがその道程は順風満帆ではなかった。当時は室町時代から続く名門狩野一族などが画壇に地盤を築いていた。京都に何の足掛かりもない等伯は、これらと競いながら、後の天下人秀吉に取り立てられて、天下画工の長にまで昇りつめた苦勞

人絵師であった。

細密で神秘的な数多い作品群のなかで、特に私の気にとまったのは国宝「松林図屏風」である。松林を覆いつくすかのようにたれ込める霧の中にぼんやりと浮ぶ松林、墨の濃淡を生かした大胆でリアルな表現や空間の残し方など、水墨画には全く素人の私にでも伝わってくるものを感じた。解説書には「等伯芸術の頂点をなす松林図屏風は彼による和漢双方の学習成果が高次元で融合したものであることは間違いないものであると思われる」と賞賛されていた。私は入場を待たされた二時間は無駄ではなかったと思った。

それ以後、松に興味をもち、何回か松の絵のある展覧会を観ましたが、等伯に肩を並べるような絵を鑑賞出来たことはなかったと思っています。

私も、松の絵を描きたいと思いつく枚か描いてみました、しかし「松」は描けませんでした。細くて美しい松葉の塊や、突きささるような鋭い葉の先端、しなやかな枝や荒々しい幹の表情や色彩など、課題はたくさんあります。

松に限らず絵の下手さと、自分の不勉強さを思い知らされる毎日をおくっています、いつかは松を描こうと、捨てきれない夢をもった日々を送っています。

驚きと感動!! 十年振りに

日本舞踊に復帰し挑戦中です

山崎日本舞踊の会(郁踊会) 上崎 栄子

私が日本舞踊に縁があったのは姑の父が早く病気が出て福祉の方にベツド、車椅子を借りての、家での介護でした。十三年間という月日を過ぎこの世を後にされた時、私は何か皆様にお礼がしたいと、友達に話しました。その時友から中谷多江先生というボランティアで老人ホームの慰問をされている立派な先生との縁を私に合わせてくれました。それが日本舞踊への私の道でした。中谷先生にはロボットのような私に色々手足を取りながら教えて頂き色々な所へ行かせて頂いていましたが、私用で退かなければいけない長い長い間おやすみをさせて頂いていました。が、青木敬老会に先生達が来て下さるとお聞きして、何かお手伝いが出ればと思ってお出かけしました。久しぶりの先生との再会でした。そこで舞台で踊って下さっている先生の姿を拝見し驚きと感動の私でした。そつと先生に近寄りお年を聞き又もやびつくりの私でした。そんな私に先生初め郁踊会の先輩から声をかけて頂き

復帰して頑張っています。ある日先生が、「私な教えるには、おこらへんで」と笑いながら言われました。おこって教えたならそれが、いくら美しく踊っていても美しい姿ではないとの言葉に本当に先生の心くぼりの言葉が、日常生活にも大切なことに受け取れ、芸の道は上下関係、礼儀作法のきびしい世界ですが、それが今の世の中が変れば人も変ると思っていた私には勘違いに気付かせて頂きました。日本人に生れ、いつになっても上下関係は日常生活にも本当に大切な事なんだと、それを教えて頂ける先生方が沢山いらっしゃる山崎です。私を始め若い人達にもっともっと勉強させて頂き一緒にしたいな一と感じて、中谷多江先生への感謝の言葉と先生のように美しく、きびしく、思いやりの心のもち主に、今から年を取って行く私も日本舞踊を頑張ってみようと思っています。落下しそうになったら、そつと手をさしのべてくださいね。お願いします。

長唄三味線と出会って

山崎日本舞踊の会 中井 妙子

長唄三味線の会「藤の会」の今藤敏葉でございます。

昨年、山崎芸能祭に初出演させていただきました。私や弟子たちにとってエキサイティングな出来事でした。また邦楽の色々なグループの方々と交流できました事も本当にありがたく感謝しています。

思えば三味線と出会ったのは私はまだ音楽の教師として在職していた頃で、姫路の岡安喜久秀師匠につきその後縁あって今の今藤佐敏郎師匠に入門いたしました。私がかかわっていた吹奏楽や合唱も魅力的ですが三味線の音には同じ遺伝子のようなものを感じました。歌舞伎や舞踊の音楽である長唄三味線は江戸時代に開花したのですが西洋のクラシック音楽に劣らず奥深いものです。あるプロの三味線方が言われたのですが「勸進帳の中で弁慶と義経が頼朝に追われて京の都を旅立つ時の音楽に

ベートーベンの第九のテーマがオー

バーラップする」と、その毅然とした決意の感覚がそう思わせるのかも

遅くからスタートした私などはまだまだ未熟で中途半端なのですが、弟子たちに恵まれてわいわい楽しくお稽古しています。

藤の会としてはまだ一度だけの舞台ですが「都鳥」をはじめ「岸の柳」「越後獅子」「元禄花見踊」「小鍛冶」「末広がり」「秋の色種」などの名曲の数々に取り組んでいるところです。そしていつかプロの唄方に来ていただいでて人数で「勸進帳」などの大曲が演奏できたらと願っています。どうかよろしくお願いいたします。



詩吟を習って

山崎詩舞道連盟
(篠の丸吟詠会)

立石 志 穂
立石 志 穂

私達姉妹が、宮藤賀峰翠先生に詩吟を習い始めたのは、私が小三、妹が小一の春からです。

少し吟じる事が出来た頃には先生が、急死されてとても悲しくさびしい思いをしました。

その後、小田賀峰先生が「続けてけい古をしよう」と、言って下さったので、やめずに多くの吟を覚える事が出来ました。

中学生になると、学習と部活で忙しいのでけい古に行く時間が取りにくくなりました。でも、先生は大会前になったら電話を使って、練習してくださいました。私達も、先生のテレホンレッスンに慣れてきて、しっかりけい古が出来る様になりました。先生が、大会当日も会場でいろいろ指導して下さいるので、私達はいつも落ち着いて、吟じる事ができます。今年も姉妹揃って大会や芸能祭を

合わせると八回出場しました。その度に、いろいろな経験が出来てよかったです。その中でも、全国吟詠近畿決勝大会（高槻会場）で、入賞に入った事、吟道賀堂流総本部主催の十傑を選ぶ「吟士権大会」に招待吟詠で、妹は「船発大垣赴桑名」（頼山陽）を、私は「青葉笛」（松口月城）を吟じさせてもらった事は、良い思い出になると思います。

志 穂



私は、次第に難しくなる詩吟を先生がよく言われる「語りかけるように」「訴えるように」「丁寧いな読みで」に気を付けて、これからも頑張って練習していこうと思います。

志 穂



山崎町民合唱 一年生

山崎町民合唱団

阿 曾 美 穂

歴史ある山崎町民合唱団の名前は知っておりましたが、まさか自分が入団させて頂くとは思いませんでした。

前々から御誘いを受けていたのですが、中々重い腰を上げる事が出来ませんでした。「家に一人で居ると声を出す事もないので入団したい。」との友の話に納得するところがあり、入団することになりました。

お稽古に行くと、和気あいあいと練習が行われ楽しいコーラスが始まります。

最初は発声もままならず不安でしたが、一時間半の練習後は気分良く鼻歌を歌いながらの帰宅になります。

コーラスだけではなく、人生の先輩諸氏のお話を聞くのは大変に勉強になり楽しく過ごさせて頂いています。

昨年の十二月四日には山崎文化会館で西播磨音楽祭に参加させていた

だきました。入団早々の音楽祭で、まだまだ練習が足りないながらも出演させて頂きました。コーラス初心者もの怖いもの知らずで、大きな会場で歌う楽しさのみで、今思うと冷や汗ものです。

最後に、会場の皆さんとの一斉のコーラスは会場全体に参加者全員が歌声が響き、その中に包まれて大変気持ちの良いものでした。

来る三月には「しそりの森合唱祭」が、同会館でおこなわれます。

それまでに、前回よりも良い出来になりますように指導者の先生の下、皆で先ずは楽しく、頑張りたいと思います。

どうぞ皆様、御誘い合わせの上、お聞きに来て下さいませ。練習の成果が上がっているでしょうか。ご寸評をお聞かせ下さい。

「あなたがコーラス?」「この私がコーラス?」と昨年の初夏の入団時。

「あらあ、長く頑張っているね。居場所が見つかりましたね。」となりたいたいものです。

大切な一年

宍粟和太鼓アーツ倶楽部
山崎南中学校三年生

田 中 奨 真

僕は小学二年生の時、太鼓の子供教室に入りました。そこから新しくできた倭童子に入りました。はじめの一年は自分が一番年下でしたので、すごい必死でした。毎日帰ったら練習して、ついていくので精一杯でした。そして、月日がたつにつれて最年少ではなくなり、その逆に一番年上になりました。リーダーにも選ばれました。小学二年から中学生になり、七年程やってきてはじめて引張る役割になりました。正直不安の一言でした。どうしたらいいのか分からなくリーダーなのにすぐ迷惑をかけていたと思います。周りを気にしすぎて、なかなか思うようにいきませんでした。そんな時にたくさんの人達がアドバイスをくれて、何とか克服することができました。そして僕は、周りが見れるようになってやっと大切な事に気付けました。僕は、今まで気付かなかったけど支

えてくれている人がたくさんいる事を、いつも舞台を準備してくれているのは誰なのか、いつも教えたりアドバイスしてくれているのは誰なのか、全部自分ではありませんでした。なのに直接「ありがとう」と言う事はありませんでした。それは他でも同じです。倭童子を行事に呼んで下さった方、そしてそれを見に来てくれるお客さん、でもお客さん一人一人に直接言うことは難しいです。だからこそ表現力を鍛えて、演奏で「感謝・勇気・元氣」を与えられるようになりたいです。

倭童子は終り、メンバーではなくなってしまうけど倭音で新しくスタートしています。次からは倭童子のメンバーにも恩返ししていきたいです。そしてこの一年リーダーを経験させて頂いて七年間気付けなかった事をやっと気付けました。本当にありがとうという気持ちでいっぱいです。これを演奏で表現できるように努力していきます。この一年は自身のつまった意味のある大切な一年でした。



山崎には世代ごとに、地域を愛するメンバーが集まり、個人の研鑽と親睦そして地域の文化向上をめざす団体があります。特定の趣味の元に集まった訳でもなく、このような団体が世代を繋いで存在する地域というのは珍しいのではないのでしょうか。最初に形成された団体の「新潮会」の志の高さが良き伝統を作っていたのだと思います。

今の日本は非常に残念な事ですが地方がどんどん衰退していつていきます。それに伴い特色ある地方文化もかき消されようとしています。でも、それで良いはずはありません。私たちはもっと山崎を、六葉を、深く知っていかねばなりません。知ること、郷土愛は深まっています。そして、次の世代の人々に伝えていく事が大切です。

先日たまたま見つけた本で、山崎にゆかりのある高名な先人「山崎闇

齋」のことが書かれていました。彼は「会津松平藩」の始祖、保科正之（徳川家光の異母弟）に深く影響を与え、正之が行った数々の優れた治政（革新的な善政）は闇齋の思想によりなされたこと知り、私まで嬉しく思いました。正之の行った政策では、玉川上水の開削や、貧農・窮民の救済のための社倉制がある。江戸城天守が明暦の大火で焼け落ちた時も、無駄な出費は避けるべきと、その再建を許さず、江戸の町の整備を優先しました。

正之の恩義を重んずる高潔な精神が綿々と受け継がれ、幕末の白虎隊を始め会津藩の行動に表れたのだと思います。

美しい「日本の精神」の形成に、闇齋の思想も大きく関わっている事を知ること。私たち山崎の人間にはそれも大切だと思います。



小生、実は目が悪いんです。こんな記録を書くのは、大袈裟な事かも知れませんが。

しかし、長年困っただけにこんな題をつけて書く事にしました。

この度山崎のある先生に受診、紹介して頂き、尼崎の県立塚口病院の眼科にて手術をしてもらいました。入院は二泊三日で、初めての入院、初めての手術で不安いっぱいでした。鼻涙管閉塞の為、涙の通りが悪く涙道と鼻を直接繋ぎ、チュウブを挿入し、何週間かして、チュウブを抜き取るものです。三日位は痛みもあり、手術の夜は嘔吐を繰り返し、後しんどくて大変でした。

人間の感情とは変なもので、入院中手術を呼びに来てくださった看護師さんが、怖く鬼のように見えました。術後は仏様のように見えました。さて、小生としてはこの病気について気になっていたのです。特に感激する事もなく、特に悲しいわけでもないのに涙がよく出ていました。

テレビで少し悲しい場面が出ると、たくさん涙を流して、家族にも又泣いていると言われていました。これは涙が出すぎて、鼻に通っていなかったのです。病名は前述のとおりでもっと早く治療をすべきだったのですが、なぜなのか自分でも分からず、誰にも教えてもらえず、自分では涙が多い方が目の為によいのかと思ったりしました。放っておくと涙腺炎になるらしいです。その事も初めて知り、最近目はヤニまで出てきましたので、もう手術しかなく鼻の方に通してもらったのです。長い間放って来た者として、どんな病気も専門の先生に診察してもらうことは当然ですが、分からない時は徹底して先生を探す事だと思いました。

涙目や、目ヤニが出ると、相手の目を見て話す事も億劫になり、又相手の顔を見て話す事もいやになるものです。

健康な身体こそ大切で、どこか悪いと趣味、文化どころではありませ

ん。

そんな困られた経験をお持ちの方はないでしょうか。もしそんな方がありましたら、どうぞ早期発見、早期治療に努めて楽しい人生にしていきたいものです。

川柳破丸会

清水省 三

毎月集っている会もはや百五十四回にもなりました。

会員の花夢さんの編集連絡、遊愉さんの短冊作りと西信本店ロビーへの展示など皆さんの協力の御陰で長い間続いています。

御興味のある方の御参加を歓迎いたします。

初孫に笑え笑えと 頬つつく
孫ひ孫 やしゃ孫ならび えびす顔

年老いて 焦らないけど 諦めぬ
宝物 使わなければ ゴミの山

織金 和敬
飲み込んだ 言葉の針で 胃が病む
メモしてた メモ捜しつつひと回り

是兼 芽吹
久しぶり 妻を名で呼び 雪降らす
政治家も 力無いのか 神詣

香山 釣遊
鯉のぼり 買ってと泣いた 女の子
年の暮 わずかな年金 仕分けする
志水亀の子

吸い物も ソバも良い味 出来合いで
人山へ 猪町へ お散歩に

新鮮と 買った魚を 三日目に
今日元気 だからお医者へ 来ています

田中 万来
解説は 出来てもプレー 出来ません
来年も 出来ない目標 たてている

谷口 柳幸
どう見ても 患者の方が 元氣そう
冷蔵庫 鎮座してます 期限切れ

谷口 遊愉
アドレスは聞かれとっさに住所言う
耳打ちも 耳が遠くて 皆聞え

千本 花夢
お互いにプレーキ掛け合い 夫婦生き
内緒ごと 聞き手上手に ついポロリ

千本 風筧
大津波 硬い物まで 飲み込んだ
恨めしい 咲かんで欲しい 杉の花

中津 水香
断捨離派 もつたいない派同居する
他人から 見れば夫は 良い夫

坂東 笑雅
有難い 顔して分らぬ 経を聞き
茶柱が 立っても良くない 日で終り

清水 三省
最後に万来さんの句
「充電も 放電もする 破丸会」

の様に全員楽しく元気に川柳を楽しむ
みたいと思っています。

「ターンアート展」

ターンアートクラブ

田中涼子

宍粟から出られ、全国で活躍されている作家の方々の作品を集めて、ゴールデンウィークに防災センターで、地元の高校生と一緒に展覧会をしております。

また、卒業した大学生達も出品しており、高校生にとっては成功されている先輩の芸術家の方々達、現役の大学生達とお話をする機会が出来、色んな職業があることを知り、刺激になり、これからの道標となっております。

私達地元の作家にとっても、東京で作品を出品しましたら関東のターンアートのメンバーや、宍粟出身の方々が美術館に集まって作品の批評をしてくださいます。

沖繩で彫刻家をしている小西光裕君も東京の銀座で毎年個展をしておりますが、東京のメンバーの方々が見に行ってくださいターンアートの主旨そのものです。



第二回のターンアート展の作家紹介コーナーでは、東京の赤川弘三さんから二十数点余りの作品を十数万円かけて送って貰うことが出来、展示できました。

全国から宍粟に集めると言うことは、作家さんにも負担がかかっております。でも、ふるさとを大切に思っている作家さん達は、地元の方々、里帰りで来られる方々に見て貰いたく送って下さるので、出来るだけたくさんの方に見に来て欲しいと思います。

平成二十三年度
山崎文化協会特別事業

本年度、山崎文化協会が後援した事業、イベントの実施写真です。

■第17回山崎八幡神社奉納

薪能 (H23.9.3)

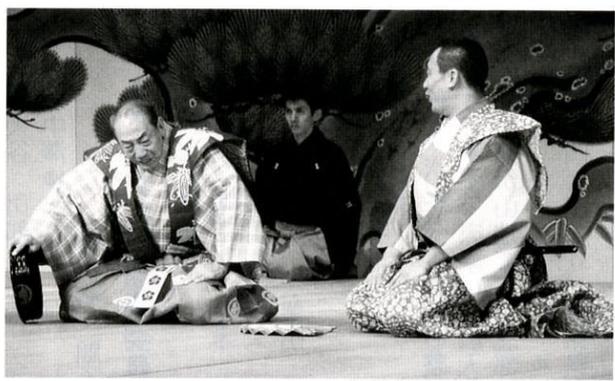
当日は台風12号の直撃で、急遽会場を山崎文化会館に変えて実施されました。

第一部の「穴栗謡曲同好会番組」では「山崎こども能楽教室」発表が取りやめ、また謡曲の会も一団体が山崎まで出てこれず、寂しい開催となりました。

第二部の薪能は予定通り行われました。趣のある「火入れ式」はできませんでしたが、その他はプログラム通りで、一流の演者による能と狂言をゆったりした会場で堪能いただきました。



こども能楽教室風景



大蔵流狂言 寝音曲 ね おんぎょく



観世流能楽 千手 せんじゆ



観世流能楽 半能 とる 融

■第7回山崎ウォーキング&ウォッチング

(H23.4.29~5.5)

ゴールデンウィーク恒例となった山崎ウォーキング&ウォッチング、今年は公開場所も増えて29か所。公開イベントもバラエティに富んだ内容で、山高「街の駅」や震災復興支援チャリティーなども実施されました。



あしだかおる原画展 (シュエット)



琉球舞踊 (堀安家)



山高「街の駅」



宍粟市山崎文化協会

役員及び団体名

会長	福岡 久藏
副会長	伊野 操治
理事	井口 武一
	浅田 耕三
	清水 省三
	宗平 圭司
	井口 武一
	町 悦子
	浅田 耕三
	栗山 節子
	竹添 和彦
	谷川 ヒデ
	伊野 操治
	志水 進
	平山 憲二
	織金 真理
	秋久 光子
	西川 慶子
	福岡 久藏
	大部 正勝
	石野 和雄
	中谷 多江
	西岡 行男
	片山 澄之
	藤永 幸正
	田口 實
	前野 良造
	小野 晋
	清水 省三
	田中 涼子
	安井 克典
	大畑 芳一
	前野 良造
監事	
事務局長	
	山崎郷土研究会
	山崎植物同好会
	山崎文学会
	新潮会
	山崎歌人協会
	山崎囲碁同好会
	山崎茶華道協会
	山崎謡曲同好会
	山崎郷土芸能保存会
	昭和会
	山崎児童合唱団
	山崎俳句協会
	さつき民踊グループ
	山崎美術協会
	パンプーファイブ
	山崎邦楽の会
	山崎日本舞踊の会
	山崎詩舞道連盟
	山崎町合唱連盟
	宍粟和奏アーツ倶楽部
	播磨さつき会
	平成会
	山崎民謡連合会
	川柳破丸会
	ターンアートクラブ

同次長 大谷 司郎
 会 計 中澤ゆかり
 (敬称略・順不同)

「やまさき文化」編集委員

編集長 西川 博敏
 委員 浅田 耕三 荒木 俊介
 鎌田 裕明 秋久 光子
 北川 泰子 栗山 節子
 町 悦子

事務局だより

今、私は「宍粟五十名山」の整備に
 関わっています。宍粟市の広大な面
 積の内九十%が山地で、市北部は、
 中国山地の一、〇〇〇メートル級の
 山並みが東西に連なり、兵庫県の屋
 根部となっています。三年前に「宍
 粟五十名山」が選定され、すでに百
 五十名の登山愛好者が五十名山に登
 破されています。

山は、今の経済情勢の中で、えて
 して「お荷物」、「やっかいもの」の
 ようになりがちです。戦後急速に増
 えたスギやヒノキの人工林は、経済
 的価値が薄れ、手入れが行き届かな
 くなっています。

しかし、昨今のエネルギー事情の
 中で、化石燃料ばかりに捉われてい
 たスタイルが見直され、地球環境に
 やさしい自然エネルギーが着目され
 てきました。その上に原発の是非が
 問われることとなり、自然エネルギー
 が加速度的に重要視されてきました。
 今からは太陽光や風力、また木質
 バイオマスなど山の資源が見直され

ることとなると思います。その意味
 で、宍粟の広大な山の価値がよみが
 えってくる日が遠くないことを願っ
 ています。

私も山のふもとに住んでいながら、
 日常生活に追われ、今まで山に入る
 ことはほとんどありませんでした。
 ところが、五十名山に関わって、いっ
 たん山に入ると、四季に合わせて木々
 の息吹きを感じ、谷川のせせらぎや
 小鳥のさえずりを聴き、そして尾根
 筋を通り抜ける風の匂いに、山懐に
 抱かれているような安堵感を感じま
 す。山頂に登り着いた時の快い疲労
 感、見渡す限りの山々のパノラマ、
 とところによっては瀬戸内海や家島諸
 島などが遠望できるなど、至福の時
 を過ごす中で癒されてきます。

五十名山の内、一、〇〇〇メート
 ルを超える山が半数の二十五山あり
 ます。どの山も「〇〇山登山口」の
 標柱が立っており、山頂には「〇〇
 山〇〇m(山名と標高)」と書かれた
 標識が立っています。今のところ、
 宍粟市外からの登山客のほうが多い
 ように思われます。山の価値を多面
 的に活用するひとつとして、市内の
 多くの人に山に登っていただき、自
 然の醍醐味を味わってほしいと思っ
 ています。「宍粟五十名山」―天空
 回廊一、〇〇〇mの風にのって―登
 山ガイドブックにそれぞれの登山コー
 スが紹介されていますので登山され
 る方には必見です。

事務局次長 大谷 司郎

編 集 後 記

シエクスピアの戯曲マクベスのせ
 りふに『この世は、舞台。人みな演
 技者』と、いうことばがあります。

このせりふのように、このたびの
 冊子三十一号では、特別寄稿として、
 癌医学の舞台に立ちその頂点でご活
 躍されている川戸出身の前田浩先生
 から玉稿を寄せていただき、畏敬の
 念を覚えていきます。

また、同じ随想として、三宅哲朗
 氏の「突然思い出した真珠湾攻撃の
 歌」は、五歳の記憶を基に悲惨な戦
 争体験を鮮明に描写された作品で、
 歳月の流れの速さを覚えます。

毎回、巻頭の小説を連載してい
 だしている浅田耕三先生の「安吉橋
 の鬼」は、軽快で頓知のよい作品で、
 できれば、作中「みずずさん」に出
 会いたい思いに駆られました。

改めて、感謝をしたいことは、毎
 回、巻頭言を斬新な感覚で記述され
 ている福岡久藏会長。そして、山崎
 文化協会の代表者の方々の原稿は、
 それぞれの活動の情景が鮮明に描写
 されています。
 これからのさらなる活動の充実を
 願っています。

編集長 西川 博敏

いぎだに
生谷温泉

伊沢の里

○お祝いの会食 ○法要後の会食
その他各種宴会承ります

〒671-2517 宍粟市山崎町生谷214番地1 TEL0790 (63)1380



コ-エ-カメラ

Specialty Camera Shop

■本店/〒671-2576
TEL(0790)62-2089 FAX(0790)62-7429
E-mail info@ko-e-1972.com

■咲ランド店/〒671-2545
兵庫県宍粟市山崎町中井10 咲ランドSC1F
TEL・FAX(0790)63-0533
E-mail saki@ko-e-1972.com



幸せへの旅立ちに——。

ふじむら貸衣裳

宍粟市山崎町山崎181 TEL(0790)62-0052

デンソー指定サービスステーション
自動車電装品整備・携帯電話代理店

カメウチ電装株式会社

本社・工場 兵庫県宍粟市山崎町今宿 98-15

TEL(0790)62-1607(代)

太子営業所・姫路営業所・神戸営業所・福崎店

宍粟市を舞台とした信頼と連携の「コミュニティ活動支援型地域SNS」サイト



「しその逸話」ムービーシアターコミュニティ http://shiso-sns.jp/community/?bbs_id=96
「しその歳時記」コミュニティ http://shiso-sns.jp/community/?bbs_id=111
「しその地名(由来)」コミュニティ http://shiso-sns.jp/community/?bbs_id=102
「宍粟の城跡」コミュニティ http://shiso-sns.jp/community/?bbs_id=122
その他、宍粟地域の情報がたっぷりのコミュニティやブログなど

しそうSNS・E-宍粟

PowerdBy 宍粟市商工会&しそ観光協会

<http://shiso-sns.jp>

就職シーズン、はじめてのお車購入に、買い換えに

ご入学・ご進学等、教育資金に

マイカーローン

学資ローン



森の妖精/ネーチャ



●豊かな街づくりをお手伝いする● 西兵庫信用金庫

http://www.shinkin.co.jp/nisisin/
TEL 0790-62-2020

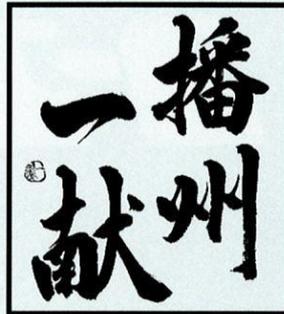


森の妖精/サッキー

一献献上 品質本位

まごころを伝えます。

TEL. 0790(62)1010
FAX. 0790(62)6218



確かな品質と味わい。

SANYOHA I
山陽盃酒造株式会社
兵庫県宍粟市山崎町山崎28

貴邸の電力を自給自足!

発電→売電	×	発電+給湯
太陽光発電		エネファーム
Panasonic		ENEOS

スマート&エコな
「光熱費=ゼロ」リフォーム

= お車と住まいの快適、なんなりと =



(株)本條商店・ホンジョウプロパン(株)

本社 宍粟市山崎町中井96

石油・タイヤ・洗車・オイル
バッテリー・車両整備・保険
☎0790-62-4321

電気・ガス・水道工事・家電全般
住宅リフォーム・太陽光発電
☎0790-63-1234

創業明治28年・さつき本舗



御菓子司
さつき

四季の菓子

御進物・おみやげ・お茶うけに、四季折々の
真心こめた手づくりの御菓子を

本店: 播州山崎町さつき通り (電)0790-62-0170
山田店: 播州山崎町山田 (電)0790-62-0160
福崎店: 福崎町西田原1177 (電)0790-22-7555



三菱鉛筆 故郷の木持ちシリーズ

宍粟杉ボールペン・シャープペン

贈り物・記念品にご好評を頂
いております(1本1890円)
レーザー刻印(名入れ)別途料金

パソコン・コピー機・文具・オフィス用品の



イトーオフィスサービス株式会社

山崎町中広瀬 宍粟市役所前

TEL 0790-62-0126